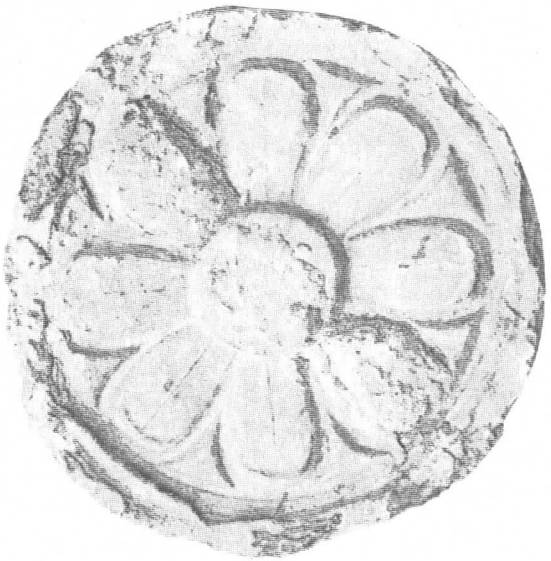
横滝山廃寺跡発掘調査概報

——昭和57年度——

第２次調査



1983

寺泊町教育委員会

基　　壇

通 路 状 遺 構（基壇北辺）

序

横滝山は，寺泊町の内陸農村地域のほぼ中央部，国鉄越後線大河津駅の東南500mに位置する小丘陵であり，その台地には古い時代に大寺院があったのではないか，あるいはトリデのようなものがあったのでないか等と言い伝えられ，古い土器や瓦片が多く出土しており，それだけに歴史を秘めた霊地ともされていました。同時にまた，地域のシンボル的な丘であり，私たちの幼い頃はよくこの丘を駆け回ったものであり，地域の総ての人々に親しまれてきた丘であります。

確かにこの丘陵上に立つと，越後平野が果てしなく広がり，信濃川が長い帯のようにくねり，指呼の間に霊峰弥彦や国上の峰々が重なり，遠く越後の山脈が整然と連なって，古代人が詠嘆した「国のまほろば」をここに見る思いがいたします。

昭和51年の夏，古くからの口承や出土品を拠り所にして，廃寺跡の存在を確かめるため，関係各位のご尽力によって第1次横滝山発掘調査が実施されました。その結果，遺構の一部を確認することができ，ここに瓦葺きの建物があったことが実証されました。

これを契機にロマンは更に大きく広がり，瓦葺きの建物は果して寺院なのか，時代はいつか，どのくらいの規模なのか，わが国の古代史との関係はどうなのか，寺泊の歴史の嚆矢といわれる弘仁13（822）年の国分寺尼法光の史実との関連があるのか等々，期待と関心が一段と高まる中でその全貌の解明が待たれたのであります。

幸い機運が熟して，今回文化庁や県教育委員会の重ねてのお取計らいによって，第2次発掘調査が行われることになりました。記録的な厳しい残暑の中で，調査団長寺村光晴先生はじめ調査団の先生方や大学生，地元高校生，作業員の真摯な発掘作業が続けられました。現地での発掘調査説明会には，関係各位が多数ご参加され，ロマンはここに甦える形で，マスコミにも大きく取り上げられました。

今次調査では，基壇が検出され規模も確認されるなど，大きな収穫がありました。当町においては，この結果に基づいて，今後も発掘調査が重ねられ，ここに埋蔵されている先人の文化遺産が解明されることを切望します。そして，これが当町のみにとどまらず，県及び国の，ひとしく共有する貴重な文化遺産として，大きく花開くことを期待してやみません。

終りに，横滝山第2次発掘調査の成果をまとめた本書の刊行を祝し，関係各位の本調査に寄せられたご芳情とご尽力に，深甚の謝意を表する次第であります。

昭和58年3月

寺泊町長　中島　甚一郎

例　　言

1. 本書は，昭和57年８月24日から９月15日の間実施した，新潟県三島郡寺泊町大字竹森，通称横滝（崎）山所在遺跡の第２次発掘調査の概要である。表題は，文化財保存事業としての申請書題名によった。
2. 本発掘調査事業は，新潟県三島郡寺泊町（町長中島甚一郎）に対する文化庁・新潟県教育委員会の昭和57年度文化財保存事業として行われたもので，寺泊町教育委員会（教育長廣田廣四）が実施したものである。
3. 発掘調査は，発掘調査会（会長中島甚一郎）を組織し，寺泊町および発掘調査会が発掘調査団（団長寺村光晴）に委嘱して行った。関係者・参加者は後記の通りである。
4. 本書は，次の諸氏により分担執筆されたものを，調査団長寺村光晴がとりまとめ，編集した。

   Ⅰ　寺村光晴

   Ⅱ　（１）寺村光晴　（２）駒見和夫

   Ⅲ　（１）寺村光晴　（２）寺村光晴・駒見和夫　（３）寺村光晴・駒見和夫・西田浩史

   Ⅳ　（１）千家和比古・折戸靖幸　（２）千家和比古・駒見和夫・鈴木治彦　（３）千家和比古・駒見和夫　（４）駒見和夫

   Ⅴ．寺村光晴

   挿図は，調査に当った諸氏の原図をもととして，駒見和夫がトレースした。
5. 本発掘調査には，各方面から公私にわたり物心両面の多大なご援助を頂いた。ご芳名は，できるだけ記させて頂いたつもりである。もし，失礼があったならお許し頂きたい。ここに衷心より深く御礼を申し上げる次第である。

目　　次

口　絵　I　　基　壇

口　絵　II　　通路状遺構

序　　寺泊町長　中島甚一郎

例　　言

I　遺跡の立地と環境…… 1

II　発掘調査の経過…… 3

（1）　既往の調査…… 3

（2）　発掘調査の経過…… 5

III　調査の概要…… 6

（1）　遺跡の概観と調査方法…… 6

（2）　基　壇…… 7

（3）　その他の遺構……12

1）　溝……12

2）　ピット……12

IV　出土の遺物……12

（1）　瓦……12

1）　平瓦……13

2）　丸瓦……16

3）　鴟尾……16

（2）　土　器……17

1）　土師器……17

2）　須恵器……18

3）　古墳時代の土器……19

（3）　鉄製品……21

（4）　その他の遺物……21

V　ま　と　め……23

あ と が き　　寺泊町教育長　廣　田　廣　四

挿　図　目　次

第 1 図　横滝山遺跡付近地形図…… 2
第 2 図　大河津分水改修前の地形…… 3
第 3 図　地形測量図…… 4
第 4 図　遺構配置図……6・7
第 5 図　基壇実測図…… 8
第 6 図　P18実測図…… 9
第 7 図　平瓦拓影……13
第 8 図　平瓦拓影……14
第 9 図　平瓦・丸瓦拓影……15
第 10 図　須恵器・土師器実測図……17
第 11 図　土師器実測図……20
第 12 図　鉄製品実測図……21
第 13 図　縄文式土器拓影……22
第 14 図　石錐・石鏃実測図……22
第 15 図　独鈷石実測図……22

図　版　目　次

図版第 1　横滝山遺跡航空写真
図版第 2　1）基壇（北側より）　2）通路状遺構
図版第 3　1）通路状遺構　2）通路状遺構西側の列石　3）基壇北辺（一部）
図版第 4　1）基壇（南側より）　2）基壇南辺
図版第 5　1）P18掘り方断面　2）P16掘り方断面　3）鴟尾出土状態
　4）瓦出土状態　5）基壇東辺
図版第 6　1）基壇西辺　2）基壇西側外の溝
図版第 7　鴟尾，平瓦
図版第 8　平瓦
図版第 9　平瓦，丸瓦，須恵器
図版第10　土師器，鉄製品，縄文式土器・石器

Ⅰ　遺跡の立地と環境

横滝山遺跡は，新潟県のほぼ中央の中越地方海岸寄りにあり，行政上は新潟県三島郡寺泊町大字竹森，通称横滝(崎)山にある。中越地方は海岸に併行して西山丘陵，島崎川，曽地（道山，小木）丘陵が雁行し，海岸側の西山丘陵は北にのび国上山，弥彦山へと連なるが，曽地丘陵は横滝山を北端として蒲原平野に突出している。海岸までの距離は約５kmである。

横滝山の東は，曽地丘陵の麓にそって北流してきた信濃川が西川などの分流を開始する基点に当り，明治41年起工，大正11年完成という大河津分水，現新信濃川も横滝山の北側を西流して日本海にそそいでいる。このため，遺跡の北・東側は氾濫原で，自然堤防がつくられ集落が発達している。大河津分水開鑿前は，島崎川が横滝山の東北麓で信濃川に合流していたが，古くは円上寺潟に流入していたものと推察される。北側は旧円上寺潟（現水田）であり，また現在の新信濃川（分水）の川筋にそい，円上寺潟付近に源をもつ須走川が日本海にそそいでいた。

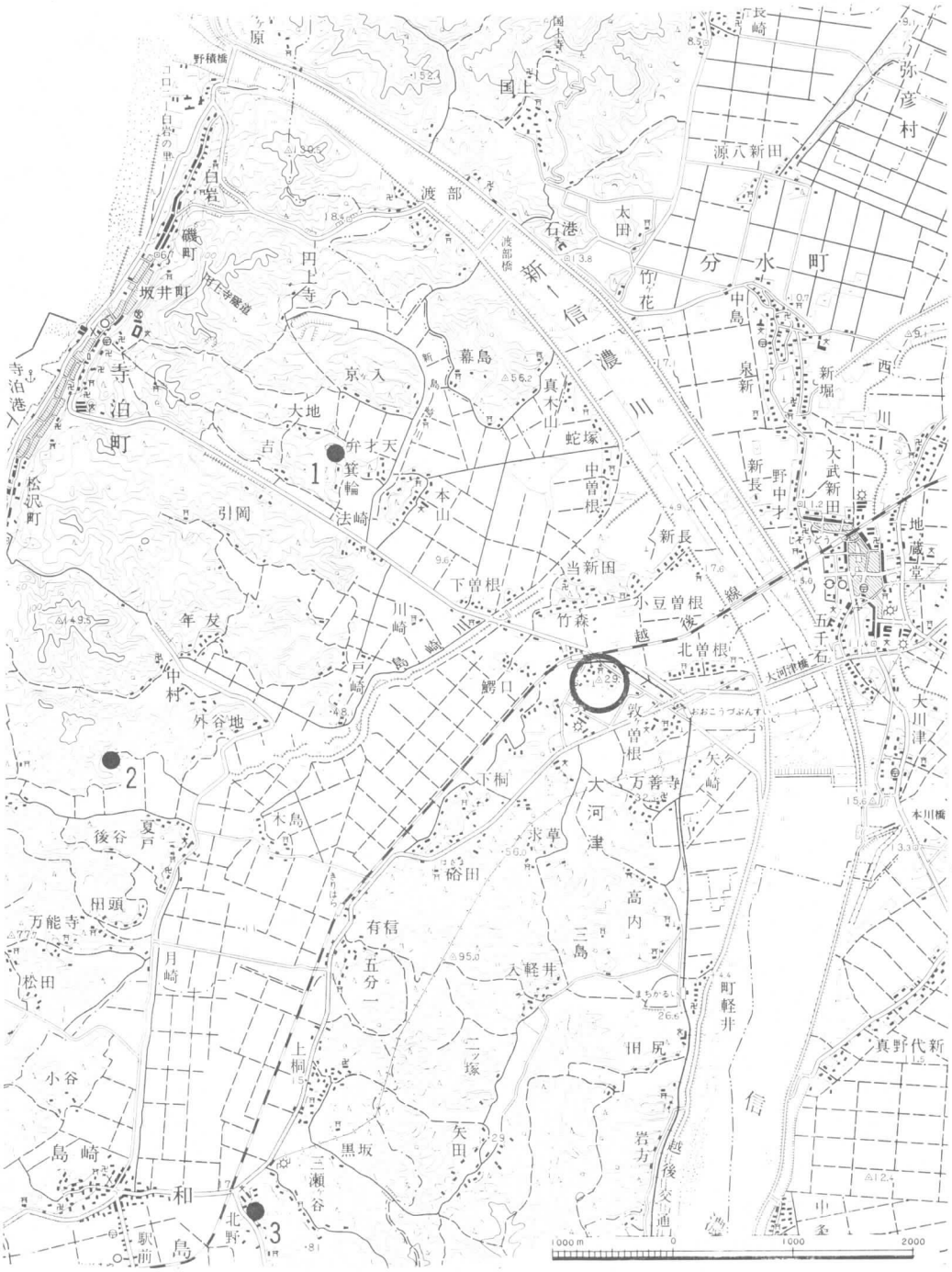
遺跡のある横滝山の直下は，古く東側に八ケ村用水溜，西側に小溜（古溜ともいう）が接していたが，いずれも潟湖の名残りと思われる。現在は水田あるいは宅地，工場用地として，干拓埋め立てられている。

以上のように，横滝山は南西側を除き，沖積平野に佇立した丘陵である。江戸時代の文化８(1811）年，すでに橘茂世が『北越奇談』のなかに「寺泊より東一里，竹森といへる古き砦の跡ありて，角櫓とおぼしき所もっとも高く方なり」と記しているように，四周よりよく遠望できる独立丘状の小丘である。大正年代，本横滝山の研究に没頭し，その顕彰に奔走された星岩治氏は『桐原御神陵誌』（大正４年９月刊，「竹森大塚古墳ノ研究」）中に，「横滝山ノ地タル，其西南ヨリ起伏セル丘陵ノ中断シテ，切通ト字セル疏水路ヲ越エテ，又山ヲ為セル北端ノ一区ニシテ，山高カラズト雖，四望開豁，風景絶佳ノ展望丘タリ」と，よくその景観を記されている。

横滝山を含めて，周辺には縄文時代から歴史時代に至る間の遺跡が多い。これらの遺跡についてはすでに『横滝山廃寺跡発掘調査概報―昭和51年度調査―』（昭和52年３月，寺泊町教育委員会）中に概略を報じており，その後も『寺泊・出雲崎―新潟県文化財調査年報第16―』(昭和52年３月，新潟県教育委員会)，『国立寺泊療養所建設埋蔵文化財発掘調査報告書―桐原石部神社御廟所―』(昭和52年３月，新潟県教育委員会）中にそれぞれ詳細に報告されているので，ここでは省略したい。しかし，今次調査出土の瓦，須恵器等に関連して，窯跡と推定される遺跡を上記の文献中より摘出すれば，

1. 寺泊町大字大池字小丸山（弁財天窯跡）
2. 寺泊町大字夏戸字中村（夏戸窯跡）
3. 和島村大字北野字中道（中道窯跡）
4. 和島村大字小島谷，旧北辰中学校々庭（瓦窯跡）

の４個所がある。いずれも発掘調査にまでは至っていないので，時期および本遺跡との関係は明らかでない。今後の発掘調査が望まれる。



第１図　横滝山遺跡付近地形図

○　横滝山遺跡　●　1. 弁財天須恵窯跡　2. 夏戸須恵窯跡　3. 中道須恵窯跡

Ⅱ　発掘調査の経過

（1）　既往の調査

横滝山は江戸時代より注目され，明治以降も古墳に比定されるなど，常に古蹟として関心の対象になってきた。以上のことについては，すでに『横滝山廃寺跡発掘調査概報―昭和51年度調査―』（昭和52年３月，寺泊町教育委員会）のなかに記述しているので，ここでは省略したい。

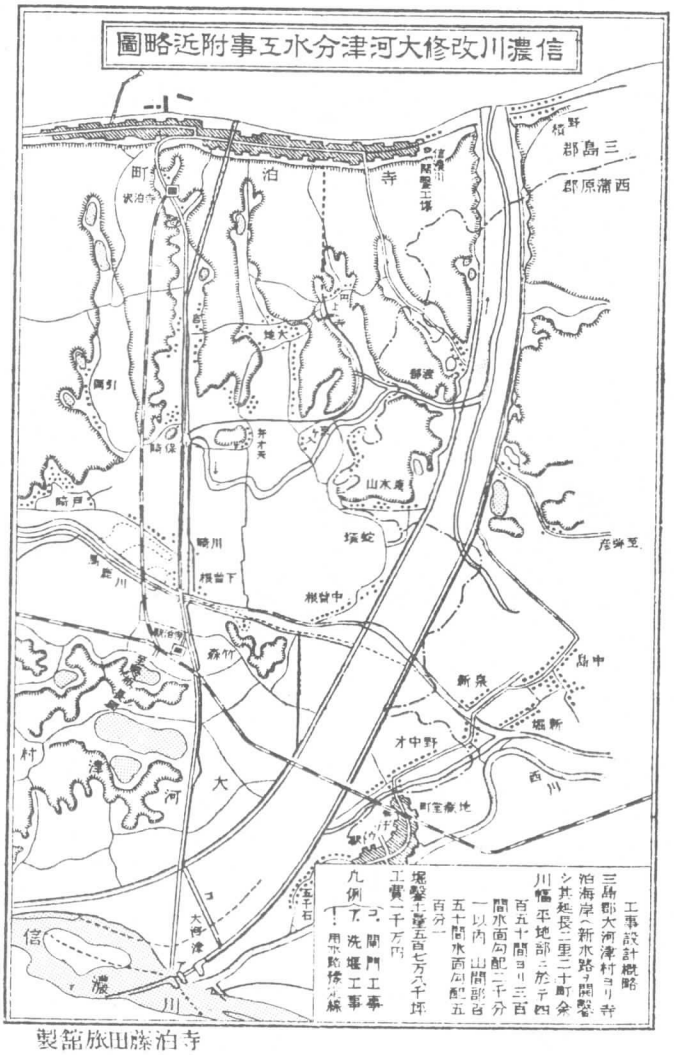
今次調査は，本遺跡から採集された軒丸瓦，鴟尾，「寺」字墨書土器等の採集遺物に端を発した昭和51年８月の第１次調査に次ぐものである。第１次調査の経緯については，すでに上記の『昭和51年度調査』概報に記載している。その後，昭和50年８月に新潟県教育委員会が実施した「三島郡海岸地域文化財総合調査」の報告書が『新潟県文化財調査年報第16，寺泊・出雲崎』（昭和52年３月刊）として刊行され，このなかに関連の記事がある。

すなわち，

> 特に，横滝山周辺の調査では，鴟尾の発見，（註）〈寺〉字墨書の須恵器坏の確認等により，寺院跡の情況証拠が集まった。

とあり，さらに「註」として以下の記述がある。

> 最初の鴟尾片１点は，小宅朝男が20年程前に横滝山で採集し，瓦塔の一部と考えていた。昭和50年に小宅は，その鑑定を中村孝三郎に依頼，中村は昭和51年１月，越後古代研究会の例会に際して，



第２図　大河津分水改修前の地形（絵はがき）―当銀敏雄氏提供―

第3図　地　形　測　量　図

これを提示して意見を求めた。本調査はこれを端緒にして横滝山に注目し，星修平所蔵の破片４点を確認したものである。

昭和51年８月の調査以後は，継続調査の必要が地元および調査団からも要請されていたが，諸般の事情でのび，昭和57年に至りようやく実施の運びとなった。これが今回の第２次調査である。この第１次と第２次調査の間の経緯については，本概報では省略しておきたい。

（２） 発掘調査の経過

今回の調査は，昭和51年度に実施した調査において，基壇状遺構の一部を検出していたので，その全容を把握し，遺構の性格を明らかにすることを目的として実施した調査である。

発掘調査は昭和57年８月24日から９月15日まで，実質22日間にわたって実施した。

８月24日 町教育委員会，調査会，調査団の打ち合せと現地視察を午後行う。

８月25日 当銀敏雄助役以下地元関係者，並びに廣田廣四教育長以下教育委員会関係者，地主，調査団，与板高等学校寺泊分校生徒等全員が参加して，午前９時，現地の発掘予定地において地鎮祭を仏式にてとりおこなう。

つづいて，昨24日の打ち合せ会議で検討予定しておいた，基壇状遺構（以下基壇と記す）の存在が予想される地点を中心に，東西27m，南北27mの発掘区を設定し，グリッド法を併用したトレンチで発掘をはじめる。

８月26～29日 前回の調査で検出した基壇南西コーナーを手がかりとして，基壇の外郭の検出を行った。その際，基壇の北東コーナー付近では雨落の一部らしい小石と礫の層が，さらに基壇北辺の中央部では通路状の遺構が検出された。

この間，８月28日には寺泊町の気温が37.3度と，全国最高を記録した。そのため地面が非常に乾き，岩のように固くなり，かつ土質の区別が不明瞭という，きわめて困難な状況となったが，われわれは調査を継続した。

８月30～９月３日 基壇の外郭が発掘されたので，基壇の上に存在する遺構の検出を行う。現地表面下約20cmで，14個所に掘立柱跡を検出する。他は表土層が浅かったり，電柱埋置のため等の攪乱部分があり，明瞭な痕跡を検することができなかった。この間８月31日には，連日猛暑のなかを発掘に参加して健闘してくれた与板高等学校寺

鍬 入 式 風 景

泊分校の生徒諸君が，新学期開始のため遺跡から去って行った。調査団は万感をもって見送ったのである。

9月4日　発掘調査現地見学会を，多数の町民やマスコミ関係者の来跡のもとで開催した。隣接の市町村はもちろんのこと，長岡市，栃尾市，小千谷市，柏崎市，西蒲原郡内，あるいは遠く佐渡郡，新潟市在住の研究者や関心を持っていられる方々が多数来跡され，200名に近い盛況であった。

9月5～7日　基壇上の柱痕の発掘，および基壇外に確認された溝とピットの発掘を行う。

9月8日　遣り方測量により，基壇および基壇外の遺構の測量を行う。

9月9日　昨夜来の風雨により遺跡が水浸しになったため，午前中は調査開始以来はじめての休養をとり，午後から遺物整理を行う。常時数人で遺跡の保安状態を見廻りする。

9月10・11日　基壇の構築状態を調べるため，基壇上に東西・南北の方向に十字のトレンチを設定し発掘する。

9月13日　発掘区の全景写真撮影，および器材整理等の作業を行う。

9月14・15日　山添組により埋め戻しを行う。埋め戻しは遺構の保存と再発掘を予想し，浜砂を遺構全面に敷く。本日をもって，全ての作業を終了する。

今回の調査は，現地見学会の日だけでなく，期間中県内各地から多数の方々が見学に来跡された。本発掘に対する関心の高さを，改めて認識させられた。炎天下，与板高等学校寺泊分校生徒諸君や，地元の方々の積極的な応援を得た。心から感謝している。発掘調査が順調に進み，多大な成果が得られたのも，これらの方々の御協力による賜であった。

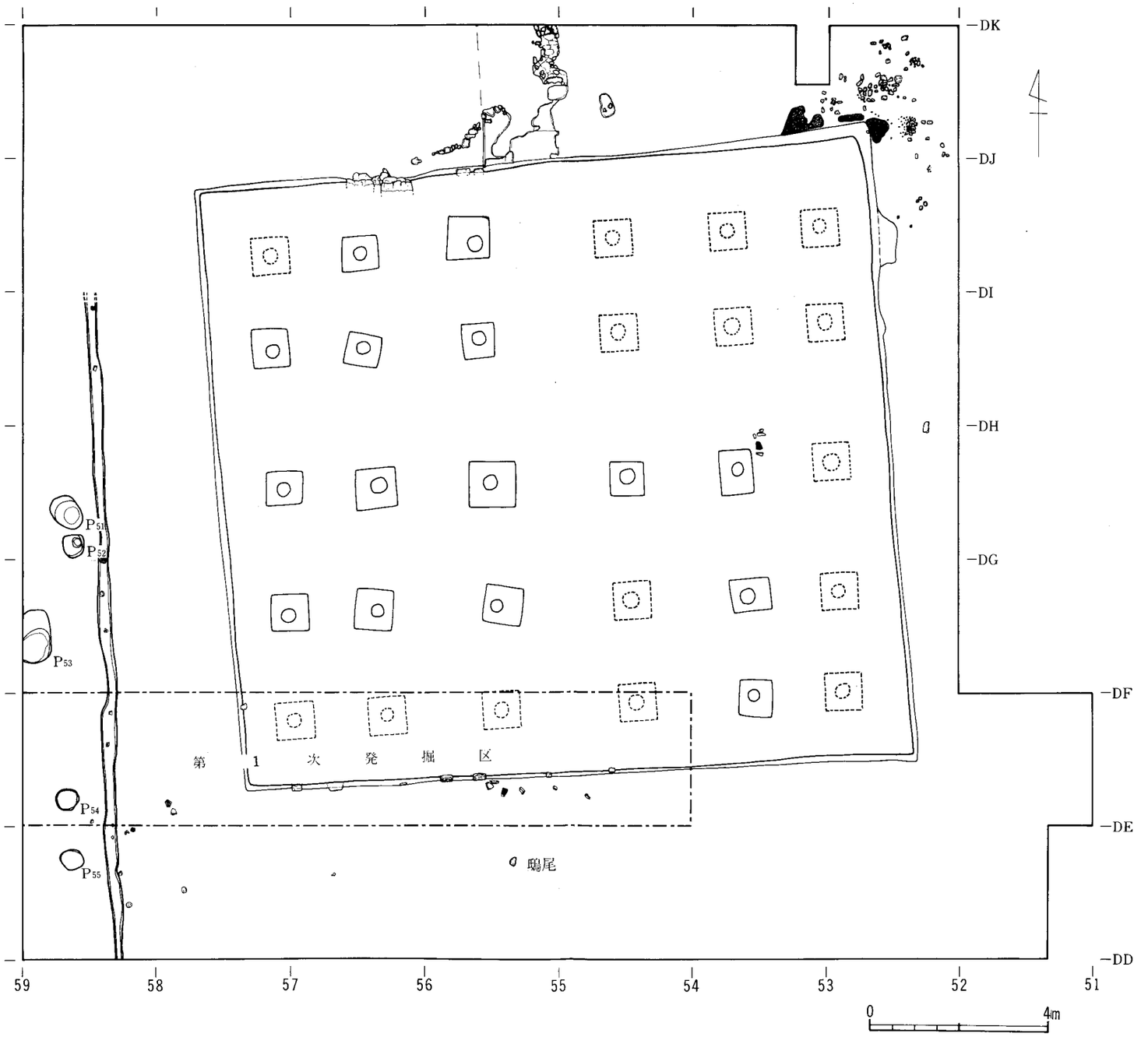
Ⅲ　調査の概要

（1）　遺跡の概観と調査方法

遺跡の概要については，すでに第1次調査の概報である『昭和51年度調査』の中に記しておいた。しかし，本調査に関連するところが若干あるので，一部を摘記し追記しておきたい。

遺跡は，東西約150m，南北約200m，比高約10mの丘陵上にある。丘陵上はほぼ平坦で台地状となり，ほとんど畑地となっているが，北端部と南西部が山林である。中央部は，現地表面下約15～20cmで地山層に達する。

発掘調査前の観察によれば，この丘陵台地の北縁部（現在は共有地，山林）一帯から瓦片が多く採集され，北西縁部および南西縁部からも採集されていたという。かつては台地全面にわたり瓦片が採集されたというが，現在は少ない。台地上がほとんど畑として耕作されているので，耕作時出土の瓦片が台地の周辺に捨てられたのではないかと思われる。また，台地上より運び出されたという礎石が，大正年代の記録に6個ある。現在その所在が確かめられるのは，


DK
DJ
DI
DH
DG
DF
DE
DD
59
58
57
56
55
54
53
52
51
P51
P52
P53
P54
P55
第 1 次 発 掘 区
鴨尾
0
4m

第 4 図　遺 構 配 置 図

竹森神社前の１個のみであるが，これは長径1.5m，厚さ20～30cmの砂岩質である。発見時の状態および原位置については，古いころであるので判明していない。ただ，最近台地東麓の小田吉松氏宅の宅地造成に際して，崖よりころがり落ちたというのが２個あり，出土状態の一端を知ることができる。

なお，台地の西側，ことにその北半部は縄文時代晩期の遺跡で，診療所裏の崖崩壊の際も多数の遺物が出土したという。また，その南側から弥生式土器片を採集している。台地の西縁付近は第１次調査時に古式土師器が発掘され，溝状の遺構の一部を検出しているので，方形周溝墓等の存在の疑いが濃い。台地の南側は，第１次調査において発掘の対象となった塚状遺構の舞台塚があり，古くから古墳と称されてきたものである。墳頂部には石塔がある。数年前までは墳裾にあり，旧道の道標となっていたものという。さらに，その南に直径６m，高さ1.33mの塚状のものがあり，庚塚と称されていたが，現在は形状を損ね旧状をしのぶことができない。以上については，風間正太郎『桐原石部神社並神陵考』（大正４年），星岩治発行『桐原御神陵誌』（大正４年），寺村光晴・久我勇『寺泊のおいたち』（昭和35年）等に詳しい記述がある。

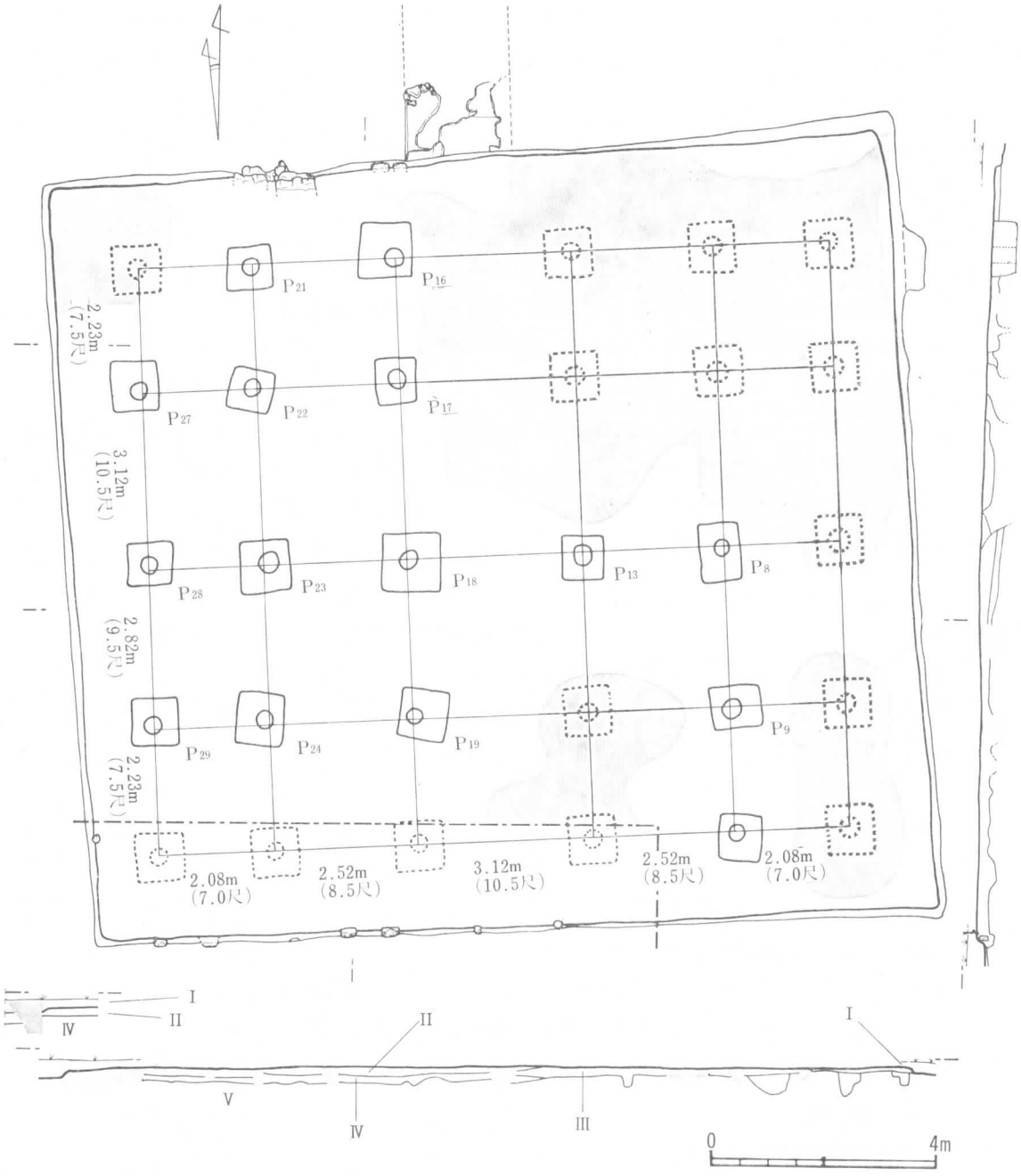
第１次の発掘調査は，台地のほぼ中央北よりに基準杭（ＢＭ１）を設け，ＢＭ１より真南82.9mと113mにも基準杭を設け，それぞれＢＭ２，ＢＭ３とした。ＢＭ１をＤＫ50とし，この南北基線（磁針方位は西偏約 7°0′）を中心として，台地全体に３×３mのグリッドを設定し，このグリッドを併用して大小７つの発掘区（トレンチ）を設けた。なお，各単位グリッド（３×３m）は，アルファベット２文字と，２桁の数字の組み合せによって呼ぶこととし，基線を50とし，東へ49．48．47……，西へ51．52．53……とし，それに直交する南北方向は，遺跡中央部をＤＡとし，北へＤＢ．ＤＣ．ＤＤ……ＤＴ，南へＣＴ．ＣＳ．ＣＲ……ＣＡと，60mごとに，上位のアルファベットを繰り上げ，あるいは繰り下げることにした。また，３×３mの各単位は，その東南隅の交点の名称で呼ぶこととした。たとえば，50ラインとＤＡラインの交点を東南隅に持つ単位はＤＡ50である。

今次の調査は，以上の第１次調査で設定したグリッドを用いて実施した。第１次調査により検出された基壇状遺構は，ＤＥ54～ＤＥ57のトレンチ内において検出されたので，まず基壇状遺構の範囲を確認するため，その外郭部の発掘から開始し，最終的には，ＤＫ59．ＤＫ52．ＤＤ52．ＤＤ59を結ぶ線内を全面発掘し，基壇を現出した。なお，発掘の経過にともない操作上から，他にＤＥ51グリッドとＤＤ51グリッドの西側約1/4を発掘した（第４図参照）。

（２） 基 壇

構造・化粧等の内容は別として，単に建築物をその上に建てるために作られた壇を基壇と称するならば，本遺構は基壇と称してさしつかえなかろう。しかし，普遍的にみられるような版築等はなく，土壇の側面の保護等も充分ではない。第１次調査時には基壇状遺構と仮称していたものである。

本基壇は，台地の北半部において検出された。現状は畑であり，東側が若干共有雑草地に入



第5図　基　壇　実　測　図

I 黒灰色土層　II 暗褐色土層 ロームブロックを若干含みやや粘性がある　III 明褐色土層 ローム粒子を多量に含む　IV 褐色土層 やや粘性がある　V 地山（褐色粘土質土）　ドットは撹乱部

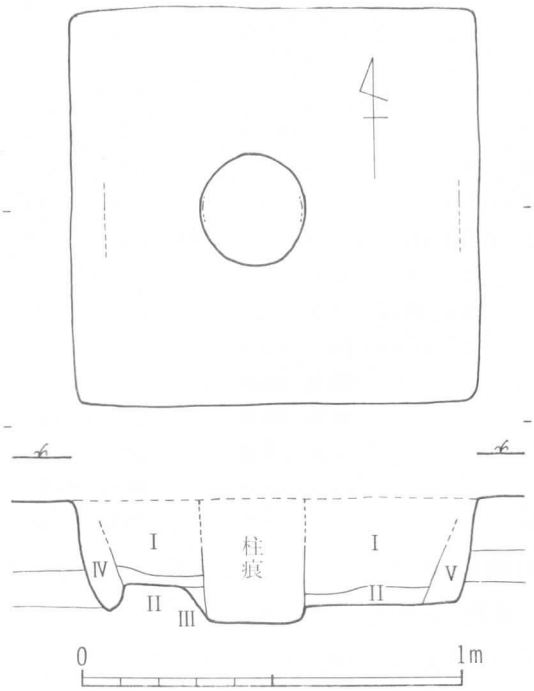
り，畑と雑草地の境界には松木が植えられていた。基壇は現地表面下15～20cmにあり，非常に浅く，耕作のため上部は削平されたものと思われる。また，北東部分はかつて電柱を埋設したため攪乱されており，電柱の根元および側線埋設のための金具が残っていた。さらに，北西隅も攪乱を受けており，境界松並木の直下はもちろん所々に掘り込みの穴が認められた。このように，遺構にとっては必ずしも良好な状態ではなかったが，幸いにして深耕がなされていなかったため，全容をほぼ把握できたことは誠に幸いであったというべきである。なお，本遺構の所在する畑は，台地のなかでもわずかながらの高まりをもっていた。当初はこの若干の高まりに気付かなかったほどである。

平面規模　基壇は間口約15m（約51尺），奥行約13.8m（約46.5尺）である。四隅は北東隅をほぼ確実におさえたが，他は攪乱その他で明瞭でなかった。しかし，各辺縁に残る化粧のための切り石の遺存や，基壇とその周囲を覆っている土質の差によって，かなり容易に境界をたどることができた。その結果の計測値を示すと，次のようになる。

北辺長　15.10m　　南辺長　15.10m　　東辺長　13.50m　　西辺長　14.35m

なお，基壇の中軸線は，南北長13.80m，東西長15.10mである。南・北辺長は等しいが，東・西辺長は85cmの差があり，必ずしも正しい長方形ではなく，北辺も中央部分で若干北に折れている。したがって，歪みのある長方形を呈している。基壇の中心を通る南北軸線の方向は，磁北に対して 4° 30′ 西である。

構築（断面所見）　基壇の存在する地域の微地形は，基壇外側の南東部が最も高く，北西に至るにしたがい低くなっている。その比高差は約45cmである。したがって，基壇のほぼ中軸線上における断面をみると，東西断面の東および南北断面の南外側の地山（褐色粘土質土）を若干削平し，西北部の低い部分にこの褐色土を盛り（Ⅳ層）東側の地山面とほぼ同じ高さとしている。要は北側基壇外を削平して，基壇の西北部に盛土し，基壇の外周を削っている。したがって，基壇内の基本層序は，地山（褐色粘土質土）上に漸移層および盛土である明褐色土（Ⅲ層）があり，その上部が暗褐色土層（Ⅱ層）となる。



第6図　P18実測図　　Ⅰ 黒灰色土層　Ⅱ 黒灰色土層　Ⅲ 明褐色土層 ローム粒子を多量に含む　Ⅳ 黒灰色土層 やや粘性がある　Ⅴ 黒灰色土層 地山粘土小ブロックを含む

その上部がさらに耕作土（Ⅰ層）である。基壇を構成する土層，すなわちⅡ・Ⅲ層中には縄文式土器および古式土師器の破片が含まれていたが，須恵器・瓦片等は含まれていない。基壇北辺のほぼ中央より東側は，暗赤褐色の硬砂岩質の地山となっているようで，所々に硬砂岩塊が検出された。また基壇北辺はこの硬砂岩地山を削り，辺縁を化粧したものと思われる。各層はしまっているものの，版築のような入念な施工はうかがわれなかった。基壇の現高は北辺東約20cm，中央約20cm，西約30cm，南辺東約15cm，中央約15cm，西約15cm，東辺中央約25cm，西辺中央約20cmである。

以上より，本基壇は掘り込み地業は行わず，原地形が西北に傾斜しているため，基壇の外周部を削平して基壇上の低部に盛土し，平坦面として作られたものと観察される。

基壇上面と柱穴　横滝山の台地上より運搬した礎石と称されるものが，前記のように竹森神社等に遺っているので，礎石ないし栗石の残存を想定して発掘をすすめたのであるが，DG53の松木根元に拳大の礫数個を検したのみで，礎石は存在せず，掘立柱痕を検出した。

柱跡計測表　（単位はcm）

柱跡番号	掘り方 上端 北辺	掘り方 上端 南辺	掘り方 上端 東辺	掘り方 上端 西辺	掘り方 下端	掘り方 深さ	柱痕跡 径 上端	柱痕跡 径 下端	柱痕跡 深さ
8	72.0	73.5	102.5	105.5			32.5×28.0		
9	90.0	87.5	73.0	76.0			34.5×34.0		
10	75.5	76.0	83.0	80.0			32.5×30.0		
13	75.0	76.5	78.5	79.5			36.0×30.0		
16	89.5	97.0	96.0	100.5	90.0	43.0	32.0×31.5		
17	71.0	68.5	75.5	80.0			34.5×30.0		
18	107.0	105.5	102.0	102.5	97.0	28.0	30.0×29.5	28.5	33.0
19	83.0	83.0	87.0	80.5			28.5×27.0		
21	72.5	81.5	74.5	75.0			29.5×29.0		
22	72.0	75.0	74.5	72.5			30.5×28.5		
23	86.0	90.0	89.0	93.5			37.0×36.5		
24	79.5	80.5	90.0	89.0			33.0×29.5		
27	80.0	79.0	87.0	88.0			30.0×30.0		
28	80.0	77.5	73.0	74.0			30.0×29.5		
29	82.0	83.0	84.0	81.5			32.0×31.0		

掘立柱は，現地表面下15～20cmという浅さで検出されたため，随所に攪乱があり，その全部を検出できなかった。しかし，確認した15個から桁行５間，梁行４間の建物と推察され，しかも総柱であった。建物の梁行方向は現磁北より1°50′西に偏し，基壇の主軸より2°40′東に偏している。掘り方は不ぞろいであるが，一辺90cm前後のほぼ方形で，褐色粘土粒を含む黒灰色土で埋めている。柱痕跡は径30cm前後で，丸柱である。断面観察を行ったP18をみると，東西長105.0cm，検出面よりの深さ約30cmで，地山面を４cmほど掘っている。柱跡は掘り方底部よりさらに５cm程度下っている。柱底には石や板の痕跡は認められていない。柱の抜取りは断面からは観察できなかった。ただ，掘り方端部に黒灰色土と褐色粘土質地山のブロックを混入した埋め土があり，掘り方底部にも厚さ５～３cmの粘土質地山ブロックを含む黒味の薄層があり，２度にわたり掘り込みが行われたことをうかがわせている。とすれば，建て替えが考えられる。他の柱穴については検討をなしていない。なお，P16は掘り方端面のみの断面のため，柱痕部は明らかでない。P16の掘り方は，一辺約100cm，深さ43cmで，埋め

土は褐色粘土質ブロックを含む黒灰色土である。

柱間の間隔は，間口（桁行）で東から2.08m（7尺），2.52m（8.5尺），3.12m（10.5尺），2.52m（8.5尺），2.08m（7尺）であり，奥行（梁行）は北から2.23m（7.5尺），3.12m（10.5尺），2.82m（9.5尺），2.23m（7.5尺）である。なお間口（桁行）は左右対称であるが，奥行（梁行）は等間隔の対称性をもっていないようである。ただ誤差を15cmとすれば対称となる。

基壇縁　基壇側縁の化粧は，切り石を並べた簡単なものであった。切り石は東・西辺には存在しなかったようである。しかし，いずれも南側の外周に数個が転落していたので，あるいは東・西辺の南側には若干存在したものかとも思われる。南辺は破片を含め7個ほど残っていたが，外周には小片を含め8個ほどが散在していた。切り石は凝灰岩で，約30cm×20cm×15cmの長方体である。

北辺は地山を構成する酸化鉄を含む硬砂岩を利用し，切り石あるいは切り石状に化粧したものと観察され，大きさは凝灰岩切り石とほぼ同大である。中央付近約5mの範囲内に残存していた。なかには延石・地覆石状の形態をとるものも見受けられた。

基壇高は中軸線上付近で約20cm，南辺で約15cmである。

基壇外周　基壇外周は前記のように，原地形の高低を平坦にしており，このため東半部は地山面を削平しているが，南側では褐色粘土質地山上に，削平土の再堆積薄層（厚さ1～2cm）があり，古式土師器片を包含していた。この層が自然堆積かあるいは意図的なものであるか否か等は，今回の調査からは判然としない。

南辺ほぼ中央付近，基壇外1.8mに検出された鴟尾片は，上記層面より7～8cm浮いていた。基壇外南西部には瓦片，須恵器片，土師器片等が，かなり集中的にまとまって存在していたが，遺構は検出されていない。なお，基壇西辺外約3mに，基壇西辺にほぼ併行して南北に幅約20cm，深さ4cm前後の浅い溝が走り，溝中に土師器・須恵器片，瓦片等を包含していた。溝の北側は攪乱部分に達していたため，延長については明らかでない。

さらに基壇北東隅付近に，2～3cmから拳大の礫の広がりが認められた。一見敷きつめたような状態であり，当初雨落溝の一部ではないかと考えられたが，他の部分には検出されていないので，砂岩状地山の露出部が崩壊した疑いが強い。

通路状遺構　基壇北辺のほぼ中央（DJ55）付近に，北へのびる通路状遺構を検出した。所々に攪乱があるが，硬砂岩を床とし，幅約1.9mである。現基壇面と通路状遺構床面との差は15cm前後である。基壇に接して奥行25cmの階段状のテラスがあり，現基壇上面よりの差は約10cmであるが，テラスと通路状面との差は8cm位である。砂岩のため明瞭な角を検することができなかったが，あるいは低い階段が造られていたと考えた方がよいかも知れない。通路状遺構面は旧地表面より4cmほどの高さをもっている。

また，DJ56において，基壇縁から東北方向にのびる石列が検出された。定型化していない拳大から頭大の酸化鉄を含む硬砂岩塊で，石列の長さは約2m，末端は通路状遺構に接している。

（3） その他の遺構

1） 溝

基壇西辺外約3mに，西辺に併行して溝が検出された。DD58～DH58の間にあり，南北に走り，北は攪乱部分に入っているため不明であり，南は発掘区域外へとのびている。幅約20cm，深さ4cm前後であるが，若干の広狭深浅がある。断面観察からは底に暗褐色の厚さ1～2cmの薄い層があり，その上部は黒灰褐色土である。遺物はこの上層にある。したがって溝底面よりやや浮いた状態で検出されている。出土遺物は土師器小片や瓦小片で，時期は基壇外周出土の遺物と同じである。

他にDD52に溝状の掘り込みが検出されたが，発掘の結果は攪乱された穴と思われ，遺物は全く出土していない。

2） ピット

P51　DG58グリッドに位置している。長径77cm，短径60cmの楕円形状を呈し，深さは遺構確認面（以下同じ）より約65cmである。

P52　DG58グリッドに位置している。径約47cmで，ほぼ円形を呈している。深さは浅い部分で約14cm，深い部分で約40cmである。

P53　DF58グリッドに位置している。長径107cmの不整形で，一部は発掘区域外へのびる。深さは約72cmである。縄文式土器片2個，石鏃1個が出土した。

P54　DE58グリッドに位置している。径約50cmの円形を呈して，深さは約35cmである。

P55　DD58グリッドに位置している。径59cmでほぼ円形を呈し，深さは約30cmである。

以上いずれのピットも，側壁はほぼ垂直で，底面は平らに近いU字形である。出土遺物等から縄文時代に所属するピットと思われる。

Ⅳ 出土の遺物

（1） 瓦（第7・8・9図，図版七・八・九）

出土の瓦類は，一般屋瓦としての丸瓦・平瓦と道具瓦としての鴟尾瓦の各類がある。しかし，そのほとんどは平瓦であり，従来採集されていたような瓦当の出土はなかった。遺物は，遺構面が非常に浅いことに加え，後の耕作行為などの影響を受け，とくに大きな瓦類などは，鍬先に触れた場合掘り出されて廃棄された傾向がつよい。したがって，出土量は非常に少なく，また遺存の状態もすべて破片でよくない。これらは，基壇部攪乱層内および基壇周辺より出土しており，遺構に密着した良好な出土状態のものはなかった。また，瓦類は前回の調査においても出土し採集されているが，今次調査出土品との差異は基本的には認められていない。以下，

第7図 平　瓦　拓　影

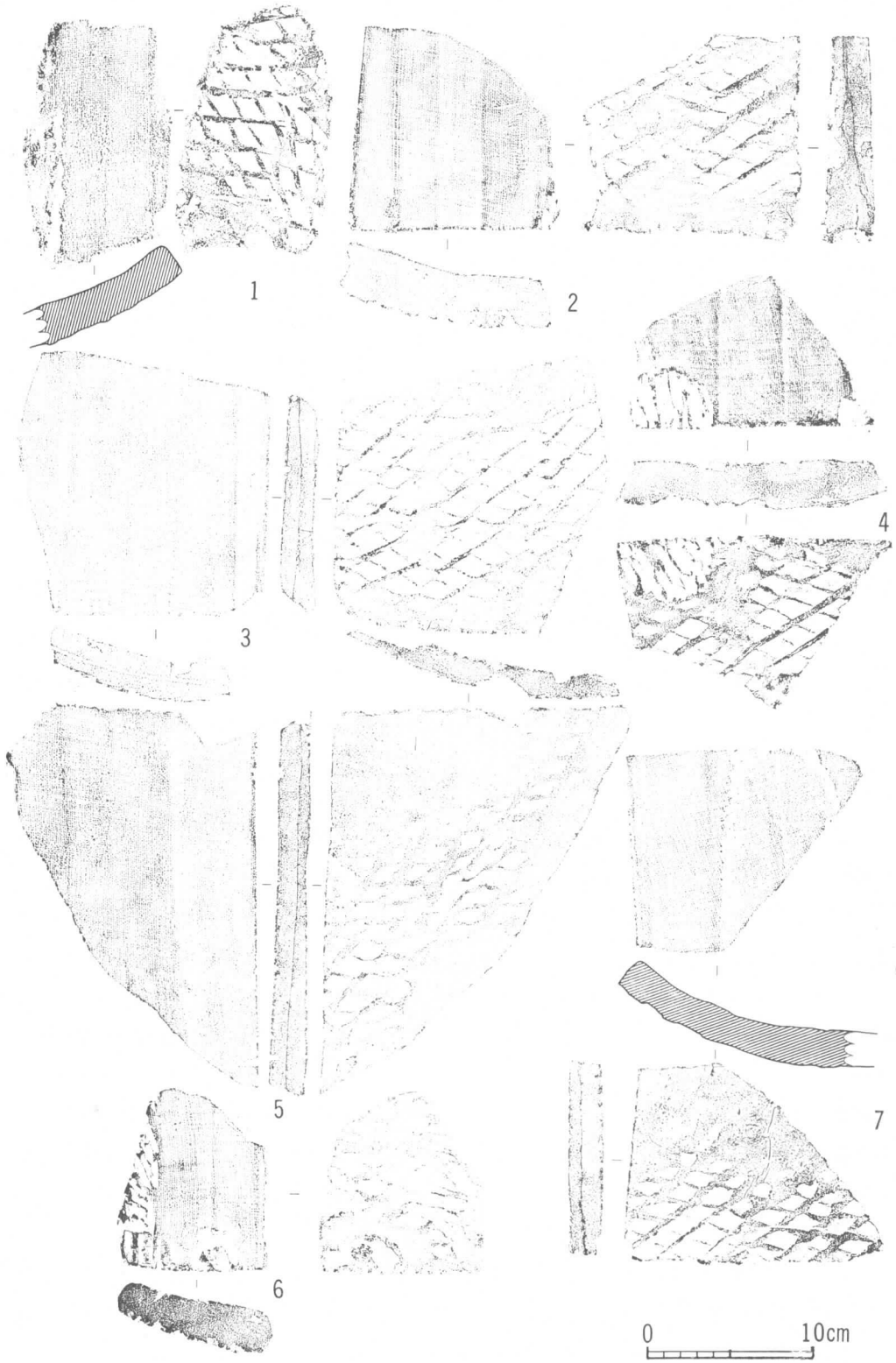
個別的に観察し，その特質を明示したい。

1) 平瓦

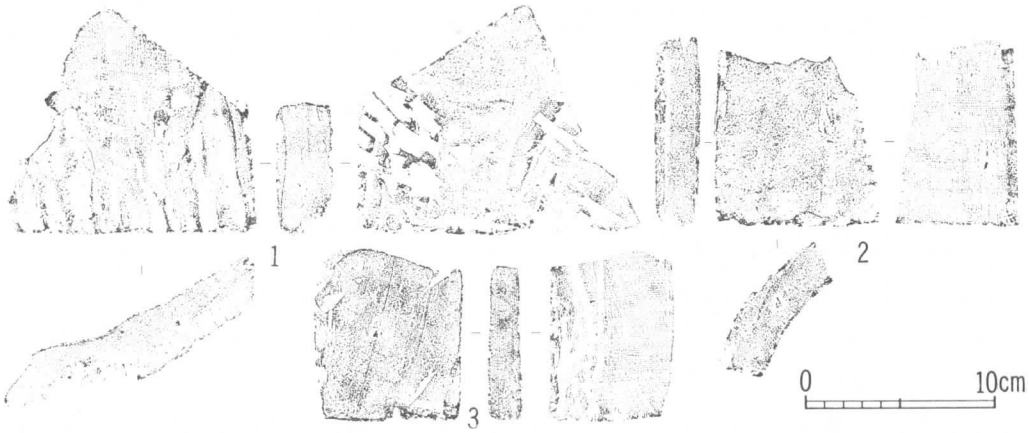
平瓦は量的には多数を占めるが，完存品はない。第1次成形は各凹面（外面）に幅5cm前後の模骨型の痕が明瞭に認められることから，粘土板を巻きつける桶巻作りの手法によるものと考えてよい。さらに，第2次成形は凸面（裏面）に残された圧痕から，縄叩き目と斜格子叩き目の手法を選択していることがわかる。とくに，出土瓦のほとんどに付された斜格子叩き目は，2～5mmの太い凸線により区画された一辺1～1.5cmの彫りの深い格子目（Ⅰ類）と，2～4mmと1～3mmの凸線により区画された一辺0.9～1.4cmの若干小さ目で粗いもの（Ⅱ類）の2類に大別される。

模骨の桶抜きののち凹面には布目を残すが，これには3cm²の単位面積中における経糸・緯糸の糸の本数が24～27本×26～27本の比較的粗いもの（A類）と，25～27本×34～36本の比較的細かいもの（B類）の二種がある。そして，成形後の調整としては，凹面・凸面・側面・端面のほとんどにケズリ，ナデの手法を加えている。

第7図1（図版八—1）は，今次の出土瓦中叩き成形に縄目を用いた唯一の例であり，現存（狭端側欠損）25.5×31.5cm，広端面厚さ2.0～2.3cmのもので，最も残存度が高い。凸面は幅3mmという比較的細かい編みの縄を付した叩き板による縦・斜位の2次成形後，一部にヘラ



第8図　平　瓦　拓　影



第９図　平瓦・丸瓦拓影（１平瓦，２・３丸瓦）

ケズリ調整を施している。縄目叩き目は前回の調査においても出土しているが１例でしかなく，本遺跡ではこの手法は一般的でないようである。凹面には，本数的にＡ類相当であるが，他の布目に比してやや糸の太い粗い布目がある。また，粘土板作成時の糸切り痕も明瞭に認められる。模骨痕は幅４～５cm程度のものが確認される。凹凸両面には，広端側の表裏同位置の各２カ所に，幅７mm 程度のヘラ状工具で縦位になすりつけたような凹状痕跡が局部的に重複しており，注意される。側面は粘土板分割の切断痕が残存し，無調整であるが端面はきれいにヘラケズリ調整されている。ＤＧ53グリッド出土。

第７図２（図版九―１）は，広端側欠損で約12.8×28cm，狭端面厚さ1.8～2.2cmのものである。凸面にはＩ類の斜格子目があるが，のちのヘラケズリ調整のため消され，部分的に散在するのみである。また，幅・深さとも1.5mm程度の沈線が，５・6cmの間隔でほぼ横位に２条走っている。同様例は，前回出土の瓦にも１例見られる。凹面にはＡ類の布目痕を残し，不明瞭ながらも模骨痕が認められる。狭端面はナデ調整を施している。ＤＨ・ＤＦ55グリッド出土。

第８図１は，現存（全側・端面欠損）約1.5×8.8cm，厚さ２～2.5cmのものである。凸面にはＩ類の斜格子目，凹面にはＡ類の布目を残している。焼成が他に比して粗悪で，磨耗が著しい。ＤＥ53グリッド出土。

第８図２は，現存（側・端面一部残存）約12.4×12.7cm，狭端面厚さ３～3.4cm，側面厚さ2.2～3.2cmのものである。凸面にはⅡ類の斜格子目を残し，一部に横位のナデ調整を加えている。凹面にはＢ類の布目があり，幅約５cmの模骨痕が認められる。側・端面ヘラケズリ調整。ＤＥ58グリッド出土。

第８図３（図版七―３）は，現存（側・端面一部残存）約15.8×15.2cm，端面厚さ2.3～2.5cm，側面厚さ2.0～2.3cmのものである。凸面にはⅡ類の斜格子目があり，部分的にヘラケズリ調整している。凹面にはＢ類の布目痕を残し，幅4.5cm程度の模骨痕が認められる。端面中程には幅1.5mmの沈線が横位に１条走っている。ＤＩ52グリッド出土。

第８図４（図版七一４）は，現存（端面一部残存）約9.2cm×14.6cm，端面厚さ2.5～2.9cmのものである。凸面には，Ⅱ類の斜格子目を残し，のち一部にヘラケズリ調整を施している。凹面にはＢ類の布目痕があり，幅４cm程度の模骨痕が認められる。また，凹凸両面の表裏同位置には第７図１と同様の，幅４mmのヘラ状工具等による縦位の重複した押し撫で痕がある。ＤＧ53グリッド出土。

第８図５は，現存（側・端面一部残存）約22.1×15cm，狭端面厚さ1.7～1.9cm，側面厚さ1.7～2.3cmのものである。凸面にⅡ類の斜格子目を部分的に残すが，のちのヘラケズリとナデ調整のため，格子目はほとんど崩れ，消えている。凹面にはＡ類の布目痕を有し，幅5.5cm程度の模骨痕が認められる。ＤＥ58グリッド出土。

第８図６は，現存（端面一部残存）約10.9×11.1cm，端面厚さ2.2～2.8cmのものである。凸面には斜格子目を残すが，のちのヘラケズリ調整のためにほとんどその原形をとどめていない。凹面にはＢ類の布目がある。また，これにも凹凸両面の表裏同位置に，重複する幅５mm程度のヘラ状工具等による縦位の工作痕がある。ただこの場合は，明らかに粘土を付加充填して指頭による押圧を加え，何らかの補強工作をした状況と観取される。ＤＥ57グリッド出土。

第８図７は，現存（側面一部残存）約12.2×14.2cm，側面厚さ1.9～2.2cmのものである。凸面にはⅡ類の斜格子目があり，のち一部にヘラケズリ調整を加えている。凹面には布目がほとんどそのまま残るが，側線にそって幅５～８mmの縦位のヘラケズリ調整が施されている。また，中央部付近には布のとじ目痕が明瞭に認められる。ＤＨ55グリッド出土。

第９図１は，現存（側・端面一部残存）約12×15cm，側面厚さ2.9～３cm，端面厚さ2.7～3.2cmのものである。凸面には縦・横位のヘラケズリ調整が広く施され，この部分には叩き目成形の痕跡はほとんどない。幅７mm程度のヘラ状工具による縦位の工作痕が，前記例のようにある。凸面には，これと対応する位置に粘土を付加して第８図６のように指頭で縦位に押し撫で補強した痕がある。凹面自体はＡ類の布目痕が残っている。側・端面はヘラケズリにより調整している。ＤＧ56グリッド出土。

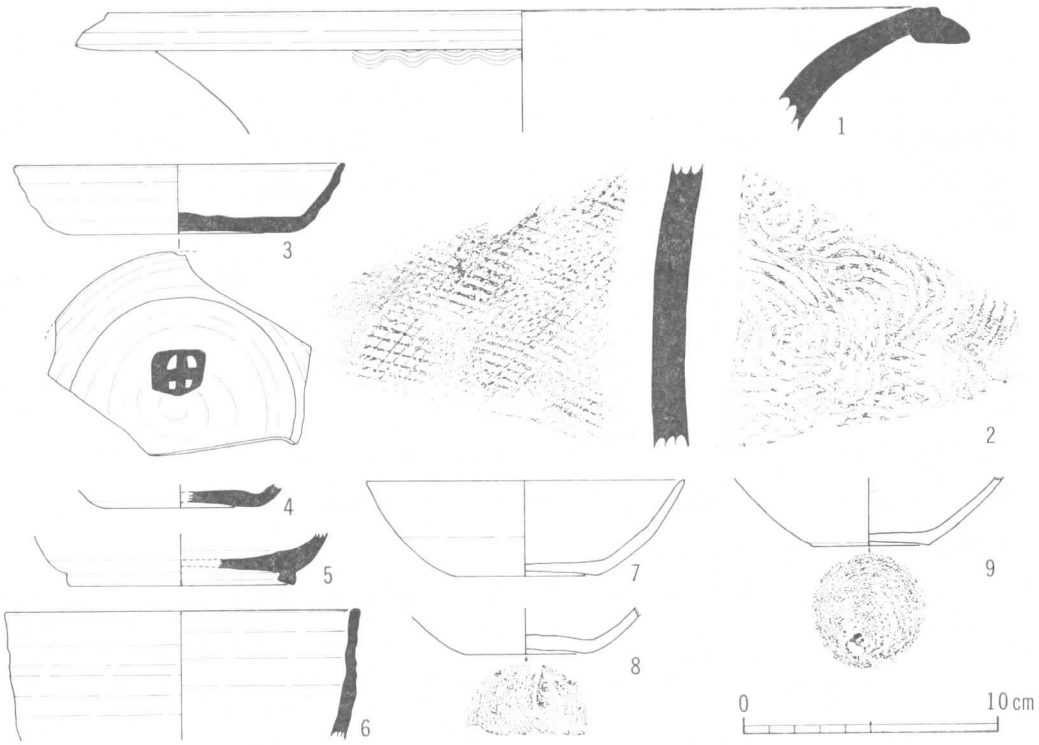
2）　丸瓦

丸瓦は非常に少なく，ここに紹介できるものは２点しかない。また，いずれも細片である。

第９図２は，現存（側・端面一部残存）約9.2×8.6cm，側面厚さ2.1～2.4cm，端面厚さ2.5～2.7cm，第９図３は現存（側面一部残存）約9.1×7.8cm，側面厚さ1.5～1.8cmのものである。いずれも，凸面には縦位のヘラケズリが施されて，第２次成形の叩き目の痕跡は残っていない。凹面には比較的細かい布目があり，３cm²の単位面積中における糸の本数は前者が28×29本，後者が28×32本となっている。ＤＤ55グリッド出土。

3）　鴟尾

鴟尾は，すでに発掘調査に至る以前にも採集されていた。これについては，第１次調査の報告書中に写真で掲載され紹介してある。胴部右側面，背面脊稜などを構成したと思われる一部



第10図　須恵器・土師器実測図（１～６須恵器，７～９土師器）

であるが，後部縁辺に縦帯を設け，両側に段型をつくった完璧なものではなく，段型をヘラ書き凹・沈線で粗く簡略化し，しかも背面（脊稜）から直接描いた状況が窺れるものであった。

今次の調査では，これら鴟尾瓦の一部を構成したと考えられる部分片が出土した。ところが，わずか２点でしかなく，全形を復原するにはなお不充分である。しかし，採集ではなく，実際の発掘調査で基壇遺構の周辺から出土したというところに意義があろう。今後の調査による出土例の増加をまって，その復原をしたいと思う。

以上，瓦類について個別的観察を記し紹介してきた。全体としては，瓦当や完存品などがなく，バラエティーに乏しいという結果であった。したがって，前回の調査から導き出された成果に対して，何ら変更を求めるところがない。

（２） **土器**（第10図１～９　図版十１～８）

出土した土器には，歴史時代のものと古墳時代のものがあり，また種別には土師器と須恵器がある。以下，歴史時代のものから紹介したい。

１） 土師器（第10図７～９）

歴史時代の土師器は坏形土器の破片５点のみであるため，資料として質量ともに充分なものを得ているわけではない。ここでは５点のうち不明瞭な細片でしかない２点を除き，他の３点

について紹介する。

第10図７は基壇上より出土したもので，調査の座標ではＤＥ54グリッドより出土した。完存品ではないが，全形が復原される唯一のもので，法量は口径12.4cm（推定値），器高3.8cm，底径5.6cmである。体部の形態は，中央部がややくぼみ，基本的には平底の底部からスムーズに内彎線を描き立ち上がり，さらに体部上位でやや外反化して口縁部に至るものである。口縁端部は丸くおさめ，底径は口径の$^{1}/_{2}$より若干小さい。器厚は３～５mm程度で，小型品であることからも薄目である。調整は体部両面に回転のナデ整形痕があり，底部は無調整，回転糸切り離しである。胎土には大・小の砂粒を混入している。焼成は良好で，色調は淡明茶褐色を呈する。

８は，７と同じようにややくぼんだ底部から体部が立ち上がり，内彎状を呈し，体部下半までの現存でしかない。ＤＤ58グリッド内より出土した。底径は4.8cmを測り，回転糸切り離し痕が明瞭にある。その後，無調整。胎土には微砂粒を含み，焼成は良好であるが磨耗が著しい。色調は淡赤茶褐色を呈する。

９は，７・８と同様内側の浮いた底部から，おそらく体部上位に至るまでのものと思われる。したがって，全体の形をうかがえないが，形態的にはむしろ椀形に近似するものであろう。ＤＤ58グリッドより出土した。体部は外表面に整形時の回転による若干の凹凸があるものの，全体的には内彎気味の立ち上がりで，器厚は３～４mm程度とほぼ一定している。底部は径4.6cmを測り，回転糸切り離し，無調整である。胎土には微砂粒を混入する。焼成は良好，色調は茶褐色を呈する。

2）須恵器（第10図１～６）

須恵器は６点が出土した。内訳は坏２，高台付坏１，椀１，甕２である。

第10図１は甕の口頸部片である。口径は32.6cmと推測され，大型甕に属するものと言える。口頸部は外反度がつよく，大きく外へ開くが，頸部自体は全体的バランスよりしてさほど長くはなるまい。また，口縁端部には断面の形状が鋭三角様である突帯をめぐらしアクセントをつけ，さらにこの突帯直下の口頸部外表に，粗い櫛状工具による波状文が４条１単位として連続２段に描きめぐらされ，あわせて装飾的効果を醸し出している。

２は甕の体部片で，器厚1.4cmを測る。上記１のような大型甕の体部を構成しているものと思われる。器表外面には格子目ふう叩き目文，内面にはあて板の同心円文が顕著にある。

３・４は坏である。ＤＤ55グリッド内において，地山面に接して出土したものである。原形を復原し得る唯一の須恵器で，法量は口径12.7cm（推定値），器高2.7cm，底径8.6cmを測る。形態的には，数値に示したとおり口・底径に比して器高の低い，いわば皿状的な様相を示す坏であることと，口径に対し底径の大きいことが留意される。体部は，中央部の若干浮いた底部から回転整形による凹凸があるものの，全体的には内彎気味に立ち上がり，上位で外反して丸くおさめた口縁部を形成している。器厚は体部３mm前後，底部５～７mmであり，底部がと

くに厚くなっている。体部は回転のナデによる器面調整，底部は全面回転ヘラケズリで整えている。胎土には微砂粒を混入する。焼成は良好で堅緻に仕上がり，色調は青灰色を呈する。なお，外面底部に「田」の墨書がある。

4は，ＤＩ52グリッド内より出土した底部から若干の体部を含む残片である。底部は推径約6cm，やはり中央部が浮き気味になり，底部の整形は回転ヘラケズリである。胎土には微砂粒を混入する。焼成は良好，色調は灰褐色を呈する。

5は高台付坏である。ＤＤ55グリッド内より出土したもので，底部と体部の境界部を介した残片でしかない。底部は推径約6cmを測り，境界部―底部外縁に高さ5mm，幅約6mmの高台部が取り付けられている。「ハ」字状にふんばりのあるものでなく，直立気味である。ただ，現存部における接地は外端面にあり，内端面は浮いている。底部の調整は回転ヘラケズリである。胎土には微砂粒を混入する。焼成は非常に良好で堅緻に仕上がり，色調は青灰色を呈する。なお，体部外表面には自然釉の付着が一部認められる。

6は埦である。ＤＤ56グリッド内より出土したもので，口縁部から体部中位下と思われる部分までの残存でしかない。体部下半と底部の詳細は不明と言わざるを得ないが，このまま徐々に数値を減じながら下向し，平底の底部を形成したものと想定される。高さにして約3cm程度が付加されるものであろう。図示したように，体部中位以上の開きはあまりないと考えてよい。なお，この部分は器厚約3mmと一定しているが，形態的に底部に向かい傾斜を強める部分から器厚を増しはじめており，この傾向が底部までつづいたものと思われる。体部外表には回転ナデ調整痕の凹凸があり，一部に自然釉の付着が認められる。胎土には大・小の砂粒を混入する。焼成は良好，灰褐色を呈する。

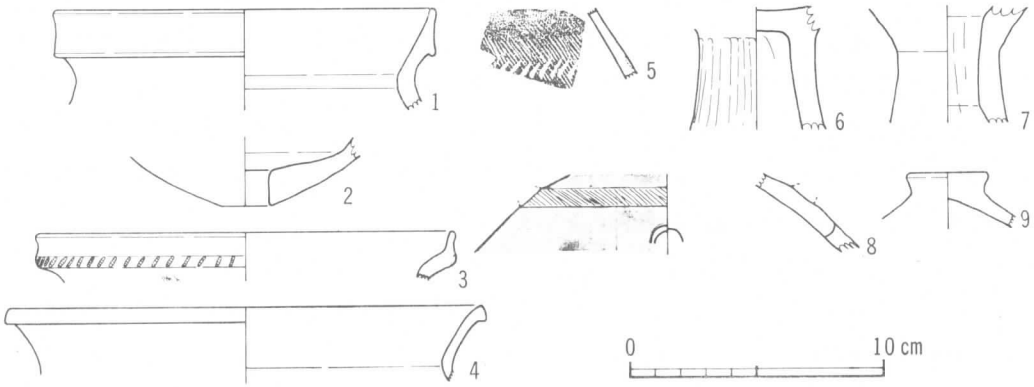
以上の歴史時代土器の編年観については，未だ本地域のみならず北陸地方全般にわたり充分に整備されていない現状からして，こまかい考定は不可能である。ただ，畿内中枢地域における動向や加賀・能登地方を中心とした北陸地方の研究成果からすれば，概観的には須恵器は1・3・6など8世紀中葉を中心とした8世紀代の展開，土師器はこれより下降した9～10世紀代の展開にそれぞれ類型を見ることができよう。

3) 古墳時代の土器（第11図1～9，図版十1～7）

古墳時代の土器はすべて土師器であり，しかも古式土師器と言われる古墳時代前期に位置するものである。9点の出土を得ている。

第11図1は壺の口頸部である。口径の推定値15.1cmを測る。ゆるやかな「く」字状線を呈して外反する頸部の上位で，するどく下方に屈曲して直立している。いわゆる有段口縁をつくるところに特徴がある。屈曲部は下方に垂れ下がり，直立部は外彎し，口縁端部を丸くおさめている。器面の調整は，内外面ともにていねいな磨きに近いヘラナデを施している。胎土は雲母等の砂粒を含み，色調は褐色である。

2は底部で，断面の器厚の在り方からして鉢形の底部と思われる。この底部の中央には外面



第11図　土　師　器　実　測　図

から内面に径1.8cmの焼成前の穿孔が１孔ある。おそらく甑として用いられたものであろう。外表面にはヘラケズリ調整が施されており，胎土は雲母等の砂粒を含み明茶褐色を呈している。

３～５は甕の破片である。３は口頸部で，口径の推定値16.5cmを測る。小さく，するどく外反する頸部の上位をほぼ直角に屈折し，直立させて短い口縁部を形成したところに特徴がある。直立した口縁部は，実際には外彎し，またその下縁に櫛歯状工具による長さ約５mmの斜行の刺突がめぐらされて，一種の装飾をなしている。体部外表面上位には刷毛状整形痕が認められる。胎土は雲母等の砂粒を含み，暗褐色を呈する。

４も口頸部で，口径の推定値19cmを測る。３に比すれば大きく外反する口頸部の上端をわずかに横につまみ出して，断面三角形の小さい口縁帯をつくっている。整形の手法は不明瞭。胎土は悪く，明褐色を呈する。

５は体部片である。内外の表面とも刷毛整形が施され，さらに外表面には櫛歯状工具による刺突が連続的に横位にめぐらされている。胎土は雲母を含み，暗褐色を呈する。

６は高坏の脚部である。棒状を呈しているが，裾に至るにしたがいやや開脚気味になる。外表面にはヘラ磨きが施されている。胎土は精選され緻密であり，淡明茶褐色を呈する。

７は器台の脚部で，裾部に至るにしたがいやや開脚するようである。整形の手法は不明瞭。胎土は精選されており，淡明茶褐色を呈する。

８は器種が明らかでない。器表面はゆるい弧状曲線を呈しており，推径1.5cm程の円孔がうがたれている。外表面には，幅1.1cmの横にめぐる接合剝離部が認められる。その接合剝離部を挟む外表面上には，全面に赤彩が施されており，本品がいわゆる日常的な器種でないことを推測させる。内面には刷毛目の調整痕が残る。胎土は雲母等を含み，淡明茶褐色を呈する。

９は蓋である。つまみは径3.2cm，内側にくぼむものではない。調整は，外表面がていねいな磨きに近いヘラナデ，内表面にもヘラナデが施されている。胎土は雲母等を含み，褐色を呈する。

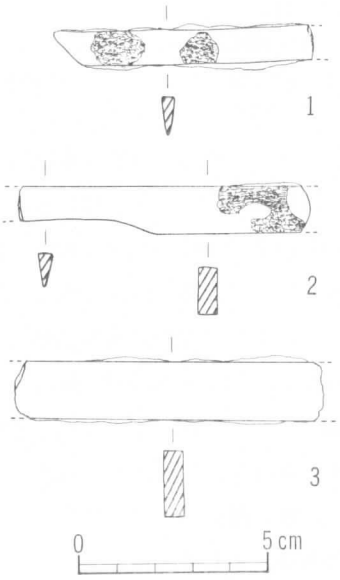
以上の古墳時代の土器を通観すると，４の甕口頸部がやや後出的な様相を呈するものの，おおむね従来の北陸土師器第Ⅱ様式の範疇に属すと考えてよい。本地方におけるこれら古式土師器の出土は，質量ともにまだ乏しく，それだけに貴重な資料ではあるが，細片であり，また確実に古墳時代の遺構に伴ったものでないことが惜しまれる。ただ本遺跡においては，前回の調査でも溝状の遺構から同型式の古式土師器が出土していた。この場合は，碧玉製の管玉が伴出し，ともに注目されている。というのは，近年，西蒲原郡巻町の大沢遺跡で塚崎Ⅱ～Ⅲ式期併行と考えられる方形周溝墓の検出が報じられているからである。このような周辺の状況，本丘陵上における当該期の遺物の在り方等からして，本遺跡にも類似の埋葬遺構等が存在した可能性が充分に考えられる。建物跡の重要性に加え，さらに本遺跡の意義を高からしめる事象であろう。

（３） 鉄製品（第12図１～３，図版九４～６）

鉄器は９点が出土している。内訳は刀子２，用途不明品１で，いずれも錆化がいちぢるしく，保存状態も決してよくない。いずれも遺構に伴ったものではない。

１・２は刀子である。１は身の中程より鋒部にかけての部分である。刀身は錆化のため明瞭でないが，平造りであろう。現存長6.8cm，身幅約１cm，重ね３mmを測る。平棟で先細となっている。ＤＥ57グリッド出土。

２は鋒部と茎尻部を欠損したものである。変則的ではあるが，茎を一段おとしての棟関，刃関のつくりはない。現存長7.6cm。刃部は関部に相当した部分より，急に抉り込んだように彎曲し，身幅８mm，重ね４mmの細身の刀身である。茎の幅1.1cm，重ね４mmを測る。ＤＨ54・55グリッド出土。



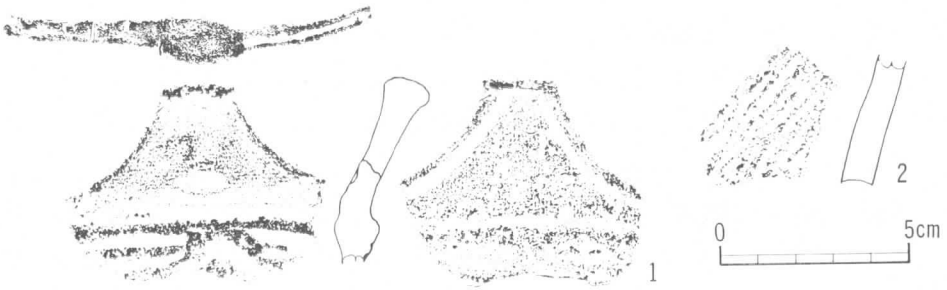
第12図　鉄製品実測図

３は幅1.5cm，厚さ５mmの板状品であり，用途不明である。

（４） その他の遺物

１）縄文式土器（第13図）

第13図１は山形の波状をなす口縁部片である。肩部には沈線によって画された変形工字文がみられる。内面は，口縁の波状にそって沈線があり，さらに２条の平行沈線を施している。胎土は砂粒・雲母を含み，焼成良好，黄褐色を呈している。この土器はその特徴から大洞Ａ′式土器に比定でき，さらに胎土・色調などが在地のものとは異なっているため，東北地方からの搬入品と考えられる。大洞Ａ′式土器は，県内では西蒲原郡緒立遺跡等に類例がみられるが，[1] 搬入品と推察されるものは本土器が県内の初例であり，現在における日本海沿岸での南限を示すものであろう。[2]



第13図　縄文式土器拓影

2は胴部破片で，単節 R$\begin{Bmatrix}L\\L\end{Bmatrix}$ の縄文を施している。胎土は若干の砂粒を含み，焼成やや不良，明るい褐色を呈している。

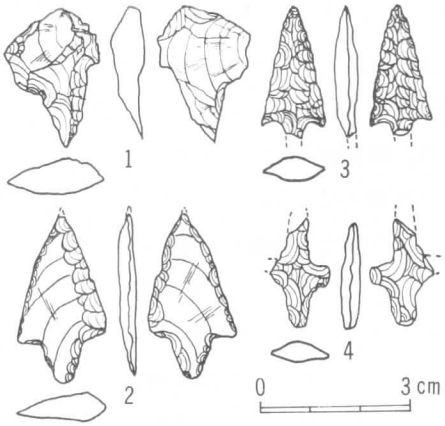
註

(1)　磯崎正彦・上原甲子郎「亀ヶ岡式文化の外殻圏における終末期の土器型式―新潟県・緒立遺跡出土の土器をめぐって―」石器時代第9号（昭44）

(2)　石川日出志氏の教示による。

2）石錐・石鏃（第14図）

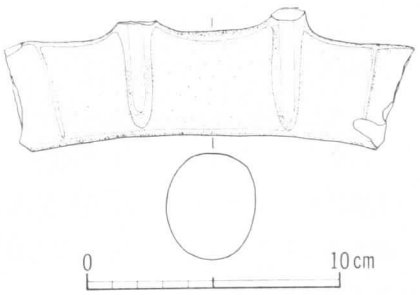
第14図1はチャート製の石錐である。長さ2.76cm，幅1.9cm，厚さ0.74cm。粗い剝離の後，彎曲部から錐部にかけて入念な調整を施している。2は粘板岩製の有茎石鏃である。現長3.3cm，幅1.75cm，厚さ0.56cm。両面とも全面に細かい押圧剝離が加えられ，先端が欠損している。3は蛋白石製の有茎石鏃で，下端は欠損している。現長2.69cm，幅1.3cm，厚さ0.47cmである。4も蛋白石製の有茎石鏃で，刃部先端が欠損しているが，飛行機鏃の亜形と思われる。両面とも全面に細かい押圧剝離を施している。現長2.15cm，幅1.23cm，厚さ0.56cmである。いずれも縄文時代の遺物である。



第14図　石錐・石鏃実測図

3）独鈷石（第15図）

石質は閃緑斑岩と思われ，精製品である。現長16.16cm，幅約4.12cm，厚さ3.54cm。両刃先端部は欠損しており，欠損後に2次加工の痕跡が認められる。抉部の両側は肥厚して稜を作っており，稜の上部は損傷している。また，抉部と刃部のほぼ中間にも，わずかな稜を有している。縄文時代晩期の所産と考えられる。



第15図　独鈷石実測図

V　ま　と　め

今回の調査は，昭和51年８月の第１次調査で検出した基壇状遺構の一部から，ここに瓦葺きの建物が存在するであろうことを予想し，その建物の規模，内容，性格等を究明するため実施したものである。その結果については，すでに前章までの間に，それぞれ詳細を述べているので，ここでは，調査の結果提起される問題，あるいは今後の課題等について，若干ふれておきたい。

（１）

調査の結果，基壇を有し，掘立柱で，しかも総柱の建物跡が検出された。柱間は，五間奥行四間である。基壇は掘り込み地業等をなさず，基壇化粧も凝灰岩の切り石を並べたにすぎない簡単なものであった。しかも柱穴は，柱根底部に石や礎板等の存在をみず，直接地山に接していた。これも簡単なものである。柱穴はP18の掘り方断面の観察からすれば，２度にわたり掘り込みが行われた可能性がある。他の柱穴については断面の検討をしていないが，基壇の中軸線と柱痕跡から復原される建物の中軸線が約2°40′ずれのあることに符合し，建て替え後の遺構である蓋然性が大である。

基壇を構成する土層中からは，瓦片や須恵器片等の出土はみられていない。基壇上からも瓦片や鴟尾片（１）等が出土したが，それらは必ず攪乱部分からの出土であった。基壇上および外周からのこれら遺物の出土量も，決して多くはなかった。基壇外南側の鴟尾（１）も小片で，しかもかなり浮いた状態で検出されている。また，柱痕跡の観察からすれば，瓦葺き建物の場合，各柱は不同沈下するおそれが充分にある。

以上，柱穴の掘り方，柱痕跡の観察，基壇と建物の中軸線のずれ，瓦の出土量の少ないこと等より，本建物は，建て替え後のものである可能性がきわめて大であると考えられる。とすれば，鴟尾を含む瓦等は，建て替え前の建物に葺かれていたもの，あるいは他に存在するであろう別の建物に属す可能性もある。発掘所見からすれば，建て替え前の建物が仮りに瓦葺きであったとしても，それは総柱であり，掘立柱のように観察される。故に，これが寺院を構成する建物の一つであるとすれば，それはかなり異質なものと考えられる。

今回の発掘では，他の建物遺構等の存在有無までは調査していない。しかし，基壇北辺から北側にのびる通路状遺構は，これが通路であるならば，北側にも建物遺構の存在を示唆している。また，南側にも建物遺構の存在を許容するに充分な平坦面が存在している。発掘調査前に撮影された航空写真（図版第一）をみると，偶然とはいえ畑に本建物遺構の区画が明瞭に印されており，未調査地域である南側にも同様の区画が読みとれる。私の僻目かも知れないが。

いずれにしても，本台地上には本建物遺構の他に，遺構の存在を可能とする空地がある。したがって，これらにおける遺構存在の有無調査と本遺構との関係を追求することが，今後に残

された大きな課題である。同時にその結果から，今回検出した遺構の性格が自から判明してくるものと思われる。

（2）

次に出土遺物を観察すると，縄文・古墳時代の遺物は別にして，おおよそ8世紀中葉と9世紀から10世紀ころの二者に大別される。

発掘所見からすれば，基壇上と基壇外周からの出土遺物の間には相違がみられず，上記年代観の異なる土器は共伴して検出されている。したがって，最終遺構の廃絶は9世紀から10世紀ころと考えられ，今回検出の建て替え後の基壇・建物遺構も，あるいはそのころに比定される可能性がある。

次に，廃絶遺構が当該期の遺物を残存しているとの基本的観点に立てば，建て替え前の基壇上建物は，8世紀中葉ころのものに比定される蓋然性が大となる。

既採集の八葉単弁蓮華文を有す白鳳様式軒丸瓦（表紙）や鴟尾は，これが白鳳時代のものとすれば，当該期の他の遺物は不幸にして現在までのところ，確実なものを検出していない。瓦葺建物が礎石を基本とするものであれば，横滝山から搬出されたという礎石の原位置が問題となる。それが礎石に間違いなければ，横滝山台地の別の未知の地点に，すなわち未発掘の地点に，その存在が認められ，当該期の遺物・遺構が検出される可能性を無視できない。いま仮りにこの可能性ありとすれば，横滝山の第1期遺構は，この未調査である未知の地点に存在するということとなる。そして，基壇上の建て替え前のものが8世紀中葉で第2期，建て替え後のものが9～10世紀で第3期となる。しかし，白鳳様式瓦が8世紀中葉ころまで残存したものであれば，それは2期に区分される。

以上の観察は，あくまで現状における調査結果からのものであり，今後の調査や知見により改定される要素を含んでいる。

（3）

横滝山遺跡に第1期が存在するとすれば，それはすでに第1次調査の概報『横滝山廃寺跡発掘調査概報―昭和51年度調査―』（寺泊町教育委員会，昭和52年3月）のなかに，「越後国府・国分寺所在論への提言」として縷々論じたように，8世紀初頭の越後国府（越後城）に関連する蓋然性が大であると推察したい。しかし，当該期の遺構検出が先決条件とすれば，ここでは次期調査に期待し，しばらくはひかえておかなければならない。

第2期は，越後国分寺の創建時に関係するようである。天平勝宝8（756）年6月の「乙酉（三日），勅遣二使於七道諸国一，催二検所レ造国分丈六仏像一」および12月20日（756年）の「越後（中略）等二十六国，国別頒二下灌頂幡一具，道場幡四十九首，緋綱二条一，以充二周忌御斎荘飾一，用了収二置金光明寺一，永為二寺物一，随レ事出二用之一」の記事が想起される。しかし，『続日本紀』に記されたこれらの記事からのみでは，国分僧・尼寺の所在地を確定することはできない。

『越佐史料』引用の「国上寺略縁起」によれば，古志郡久賀躬山寺（国上寺）は，和銅年間

（708～714）創建で，天平勝宝年間（749～756）に孝謙天皇が大成された「官寺也」と記されている。「縁起」であるのでそのまま信ずることはできないが，「官寺」に注意すれば，あながち荒唐無稽なものとして，無視し去ることができないような気がする。横滝山の第２期は，この辺から探って行かなくてはならないであろう。

第３期を９世紀から10世紀ころとし，最終遺構の廃絶もこれに関連するものとすれば，『袖中抄』の国分寺尼法光の記事が想起される。

> 今勘国史云，仁明天皇承和二年六月勅（中略）陽成天皇元慶四年云，弘仁十三年国分寺尼法光為レ救二百姓済度之難一，於二越後国古志郡渡戸浜一，建二布施屋一，施二墾田四十余町，渡船二艘一，令二往還之人得一レ其穏便一，而年代積久無二人労済一，屋宇破損，田疇荒廃，望請，被レ充二越後国俗五人一，永令二預守一云々

弘仁13（822）年に国分寺尼法光が，古志郡渡戸浜に布施屋を建て，往還の便をはかった。しかし，すでに年月を経て屋宇は破損し，田は荒廃したので，元慶４(880）年に５人の役夫をあてて管理させたいという記事である。国分寺尼とあるから国分尼寺の尼僧であろうが，その国分尼寺の所在も明確でない。しかし，渡戸浜が現在の寺泊町内であろうという説は，ほぼ動かし難いものと思われる。布施屋は調・庸の運搬者や旅行者のために駅路に設けられた宿泊所であり，国や僧によって設けられたものとされている。横滝山に検出した基壇をもつ総柱の建物を，この布施屋に比定するものではない。しかし，「屋宇破損」の記事と，既採集の「寺」字墨書土器（『昭和51年度調査』18頁，第11図），および今次調査結果等の所見を綜合すれば，第３期の建物は寺院に関係するものと推察され，この期をもって廃絶したとも考えられる。

（４）

以上，今次調査の結果から，横滝山には瓦葺や基壇を有する建物の存在が確かめられ，それが少なくとも３期乃至２期に区分され得る可能性を指摘した。しかし，その建物の性格までは，残念ながら判明しなかった。

『越佐史料』所載の寛正４（1463）年閏６月３日の「上杉古文書」によれば，

> 曽禰村年貢不足加二西古志之国衙一

の記事があり，『上杉家記』にも同様の記事がある。「国衙」は律令制下の国の政庁である。西古志（にしこし）は現在の三島郡および西蒲原郡の南辺で，最近まで西越（にしこし）村にその名を残していた。曽禰村は旧西蒲原郡曽根町，現在の西川町である。承平年間（931～937）には，越後国の国府は頸城郡に存在している。それにもかかわらず，この地に国衙の名が冠されていることは，それなりの理由が存在したものと思われる。私はその理由を，国府が頸城郡へ遷移する以前の，国府所在地から発したものと推察したい。

いずれにしても，今後第３次調査の実施を願い，その解明を切に希望する次第である。

あ と が き

昭和57年夏に行われた横滝山遺跡第２次発掘調査が，大きな成果を収めて，ここにその概報が刊行されましたことに対し，深く敬意を表します。

昭和51年の夏実施された第１次発掘調査において，古い寺院跡を示す基壇に関係すると思われる切石列が検出され，基壇状遺構であることが確認されました。そして，この時点から第２次発掘調査が切望されていましたが，諸般の事情でロマンは地下に眠ったまま，その解明はしばらく持ち越されて，今日に至りました。

今回の調査目的は，第１次調査で検出された基壇状遺構の一部から，ここに瓦葺きの建物（寺院）の存在が予想されたので，その建物の規模，内容，性格等を究明することでありました。

発掘に先立って，地主，耕作者の方々の不利な作付条件を克服されての，全面的なご協力を頂き，調査の成功を祈念しました。

調査団長には，前回と同じく和洋女子大学の寺村光晴先生をご委嘱申し上げ，東洋，立正，成城大学の先輩や学生によって調査団が結成され，８月25日に発掘調査が開始されました。そして地元の与板高校寺泊分校の生徒や作業員を含めて約40名が折柄最高気温37度で全国的にも話題になった猛暑にもめげず，一生懸命発掘作業に従事されました。

発掘調査は９月15日で終わったが，この間，町内外のこれに寄せる関心は深く，９月４日現地で行われた説明会には約200名の参加者が，遺構に目を見張り，基壇上の建物の説明に耳をそば立てていました。

横滝山の発掘調査はこれで完了したわけではなく，口承が解明され，新たなる確認が更にロマンを生んで，ひとつひとつ究明されて行く過程の中で，古い歴史の寺泊が，やがて如実に浮かび上がってくるものと期待されます。

今回の調査に寄せられた関係各位のご尽力に対し，衷心より謝意を表すると共に，本書が遠い祖先の文化遺産を今の世に結ぶよすがとなって，ここに生きる人々が改めて古い歴史と伝統を認識して，郷土を愛し，人間性豊かな心情を養うと共に，これが広く，日本古代史の解明に役立つ資となれば望外の喜びであります。

寺泊町教育長　廣　田　廣　四

発掘調査関係者

○発掘調査会

会　長　中島甚一郎（寺泊町長）

副会長　当銀敏雄（寺泊町助役）

同　宮田佐一郎（寺泊町教育委員会委員長）

顧　問　和田弥一郎（寺泊町議会議長），三浦佐太夫（同議会文教民生委員長），竹内武治（同議員），高橋剛（同）

専務理事　廣田廣四（寺泊町教育委員会教育長）

理　事　家合俊雄（寺泊町収入役），納谷一徳（同総務課長），池田三津男（同商工観光課長），小田二三男（竹森区長），山田菊治（竹森農区長），横山憲彰（県立与板高等学校寺泊分校教頭），川端公一（寺泊中学校長），水沢荘一（大河津中学校長），皆川詮成（温古会長），水戸公四郎（町文化財調査審議会委員長），斎藤一郎（同委員），近藤丈夫（同），亀山弘義（同），小宅朝男（同），竹内武（同），本間荘三（同），山崎龍教（寺泊町社会教育指導員）

○発掘調査団

団　長　寺村光晴（和洋女子大学教授）

団　員　千家和比古（国学院高等学校教諭），駒見和夫（東洋大学大学院修士課程），折戸靖幸，鈴木治彦，前谷達也（以上立正大学学生），西田浩史（成城大学学生）

顧　問　中村孝三郎（新潟県文化財保護審議会委員）

参加者　破入武夫，広瀬ミヨシ，小林イク，横田チヨ，深滝サダ

県立与板高等学校寺泊分校生徒

青柳美佐子，遠藤正人，早川澄枝，三井緑，納谷和子，二見貴子，松井悦美，石井公子，遠藤麻砂美，西海士幸太郎，近藤泰子，山田江美子，高橋ひとえ，小林徳成，本間尚巳，樋口昌樹，吉田豊，小柳小百合，松田玲子，阿部美智子，安達美智子，安達美和子，韮沢時子，倉品泰治，佐藤秀明，桑原都志子

山添組（山添安次郎）

○発掘協力者

大字竹森（区長・小田二三男），阿部力

地　主　星和男，早川増雄，星修平，渡辺敏，小田栄蔵

大河津婦人学級，寺泊婦人学級の皆さん

○発掘調査事務局（寺泊町教育委員会）

長井正雄，田中正明，田中正徳

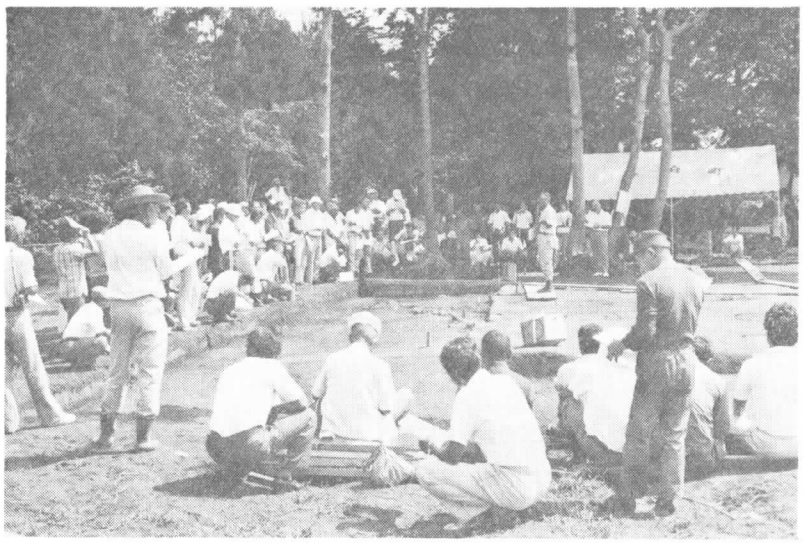
○お世話になった方々

文化庁，新潟県教育委員会，寺泊町，寺泊町教育委員会

河原純之，三輪嘉六，岡本東三，田中邦正，南義昌，近藤忠造，金子拓男，戸根与八郎，高橋保，坂井秀弥

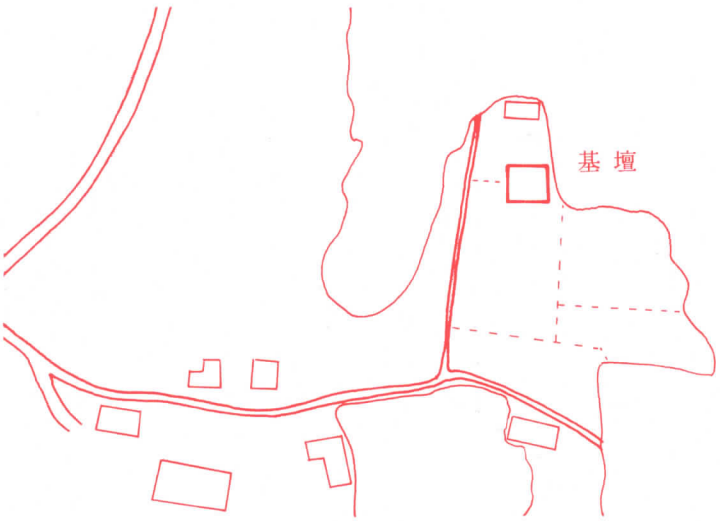
三松亭，中川成夫，久我勇，甘粕健，関雅之，伊藤善允，駒形敏郎，唐沢至朗，山崎弥作，内田昭一，斎藤嘉市，若月正光

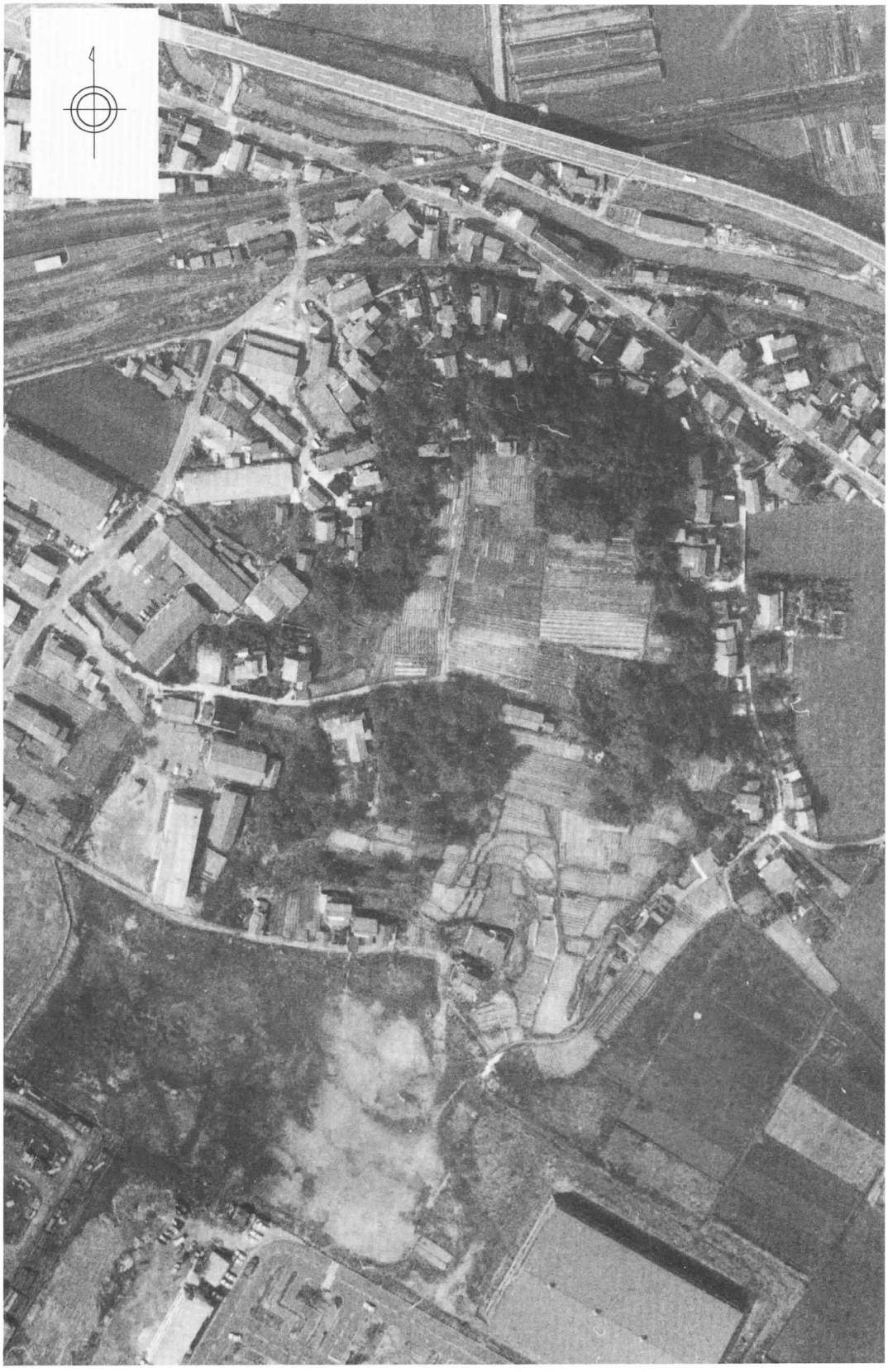
（以上順不同）



現地説明会風景（昭和57年９月４日）

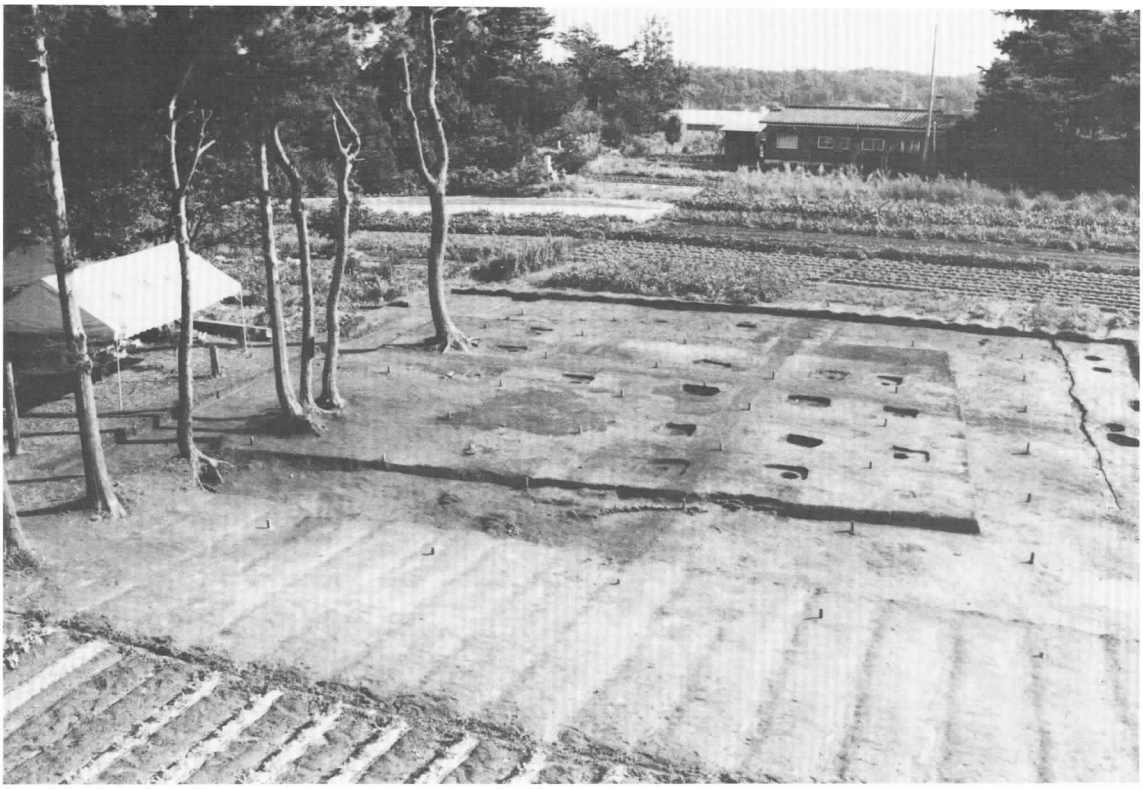
図　　版


基 壇

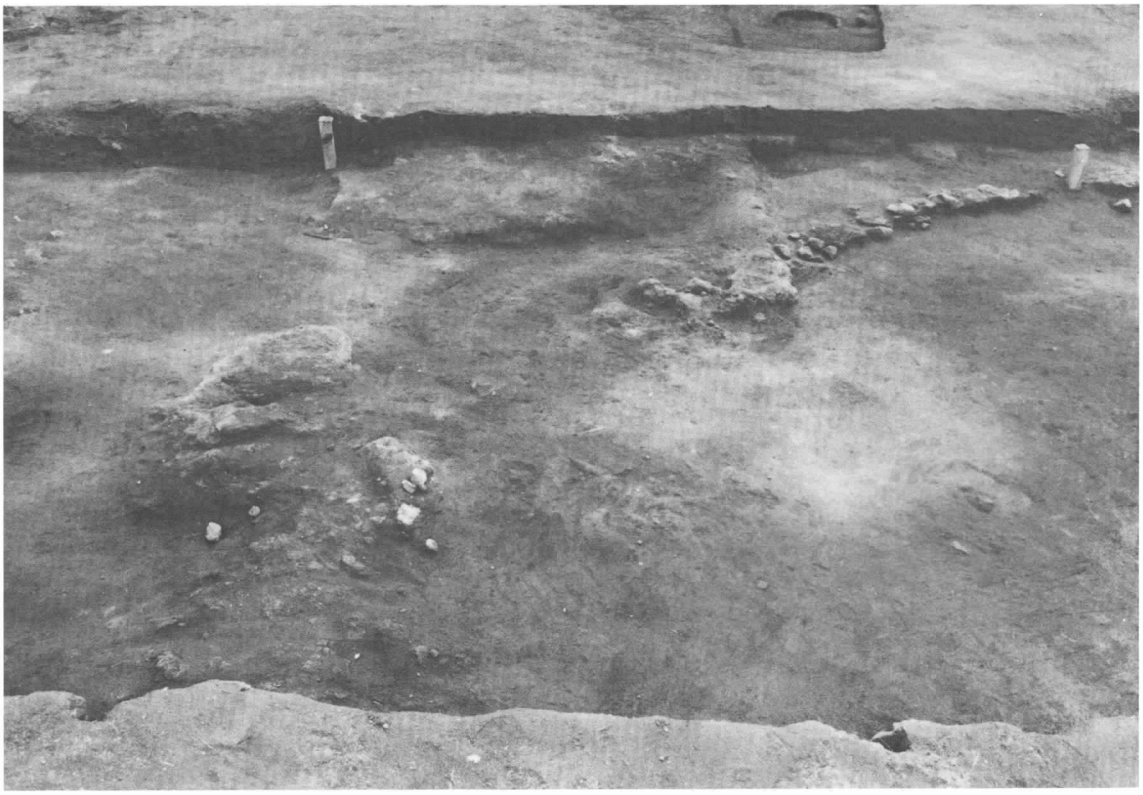


横滝山遺跡航空写真

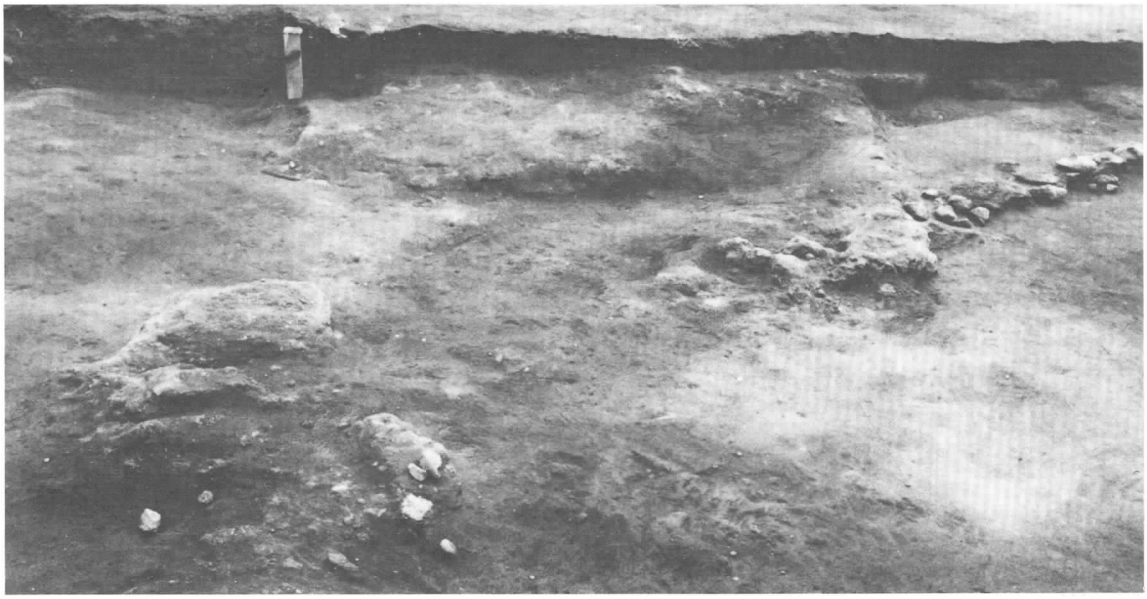
図版第二



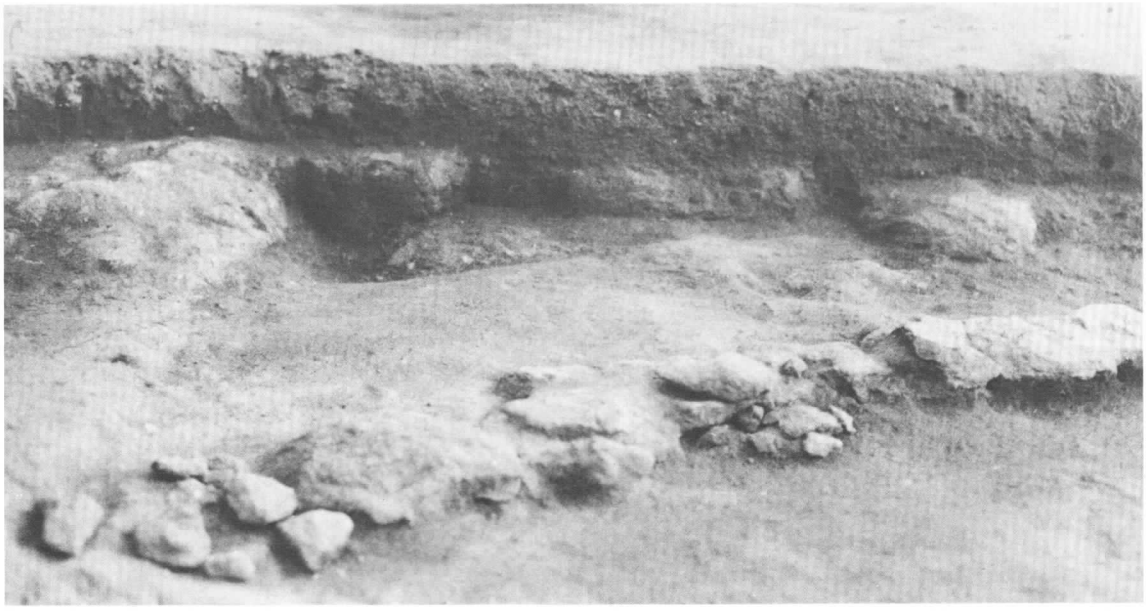
1　基　　壇（北側より）



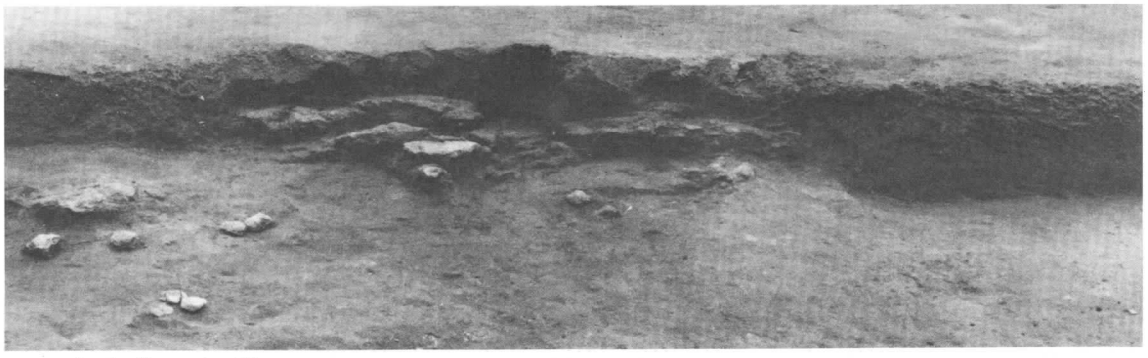
2　通路状遺構



1 通路状遺構



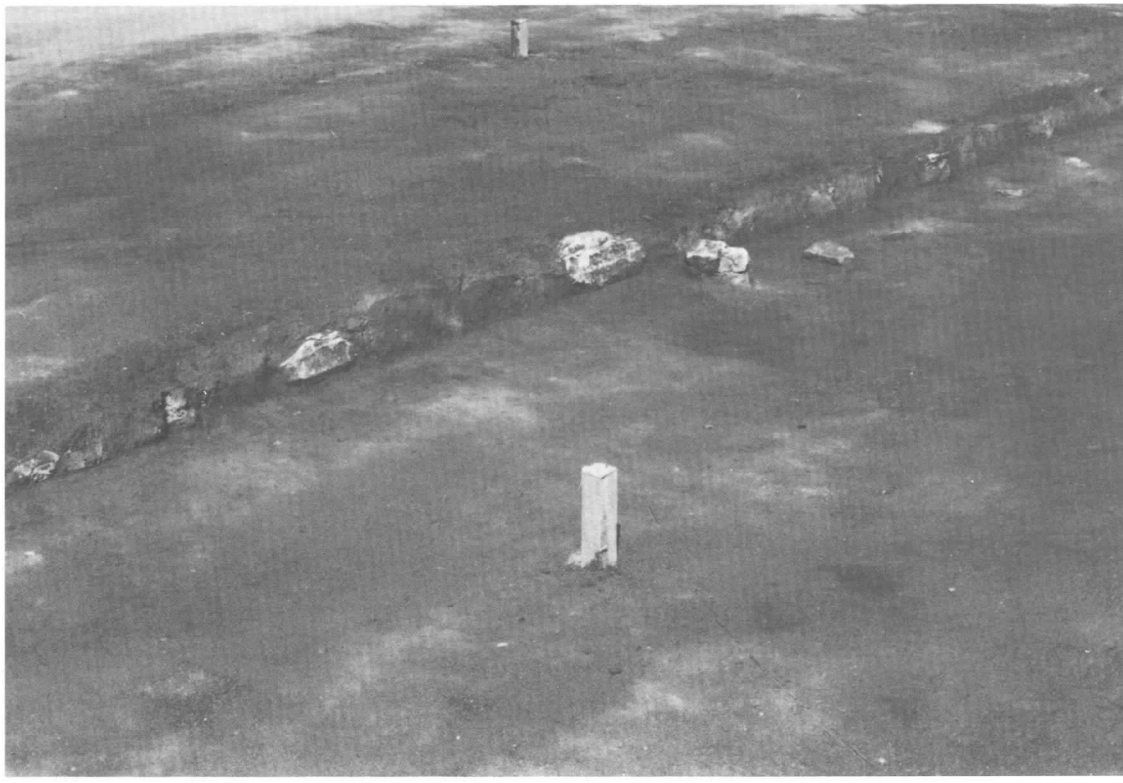
2 通路状遺構西側の列石



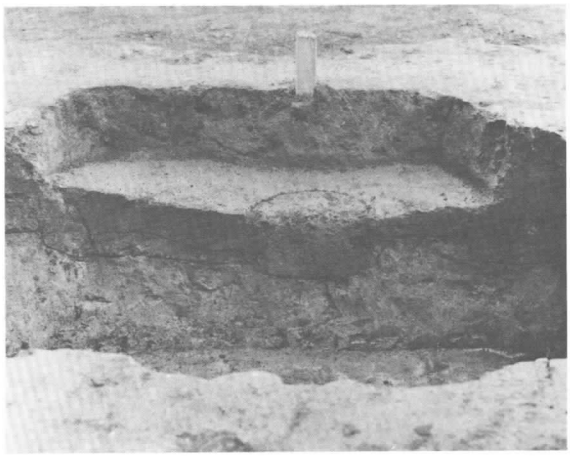
3 基壇北辺（一部）

図版第四

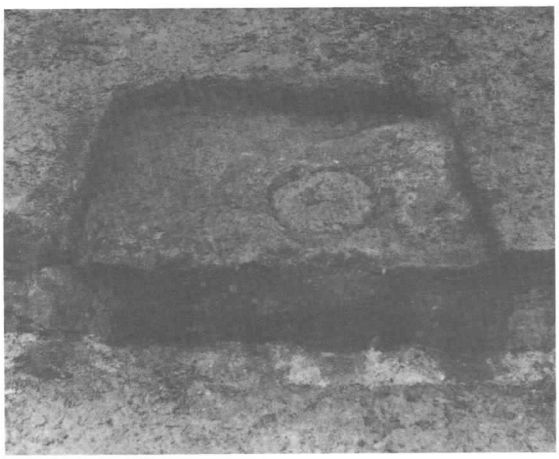
1　基　壇（南側より）



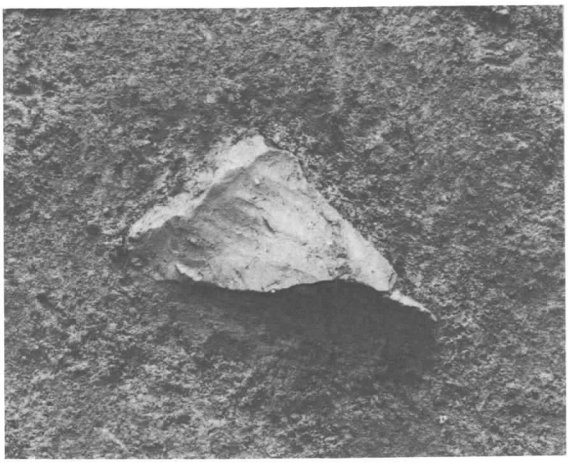
2　基　壇　南　辺



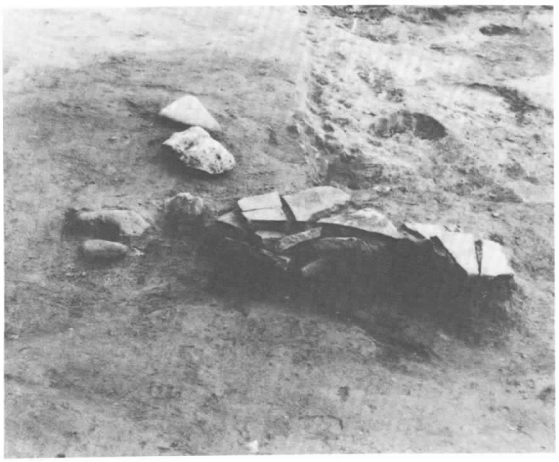
1　P18 掘り方断面



2　P16 掘り方断面



3　鴟尾出土状態（第4図参照）



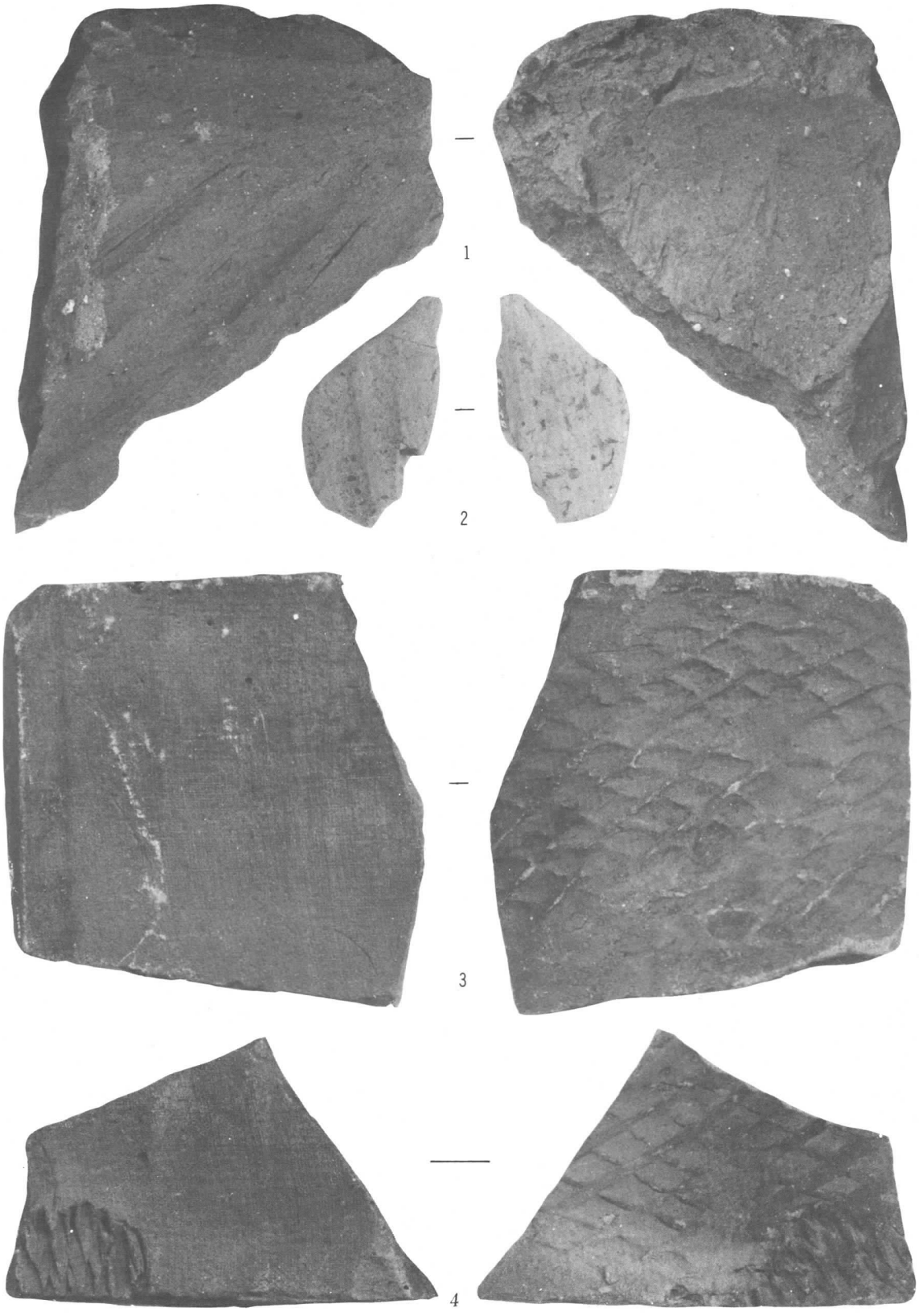
4　瓦出土状態（第4・5図参照）

5　基壇東辺

図版第六

1　基壇西辺

2　基壇西側外の溝



1

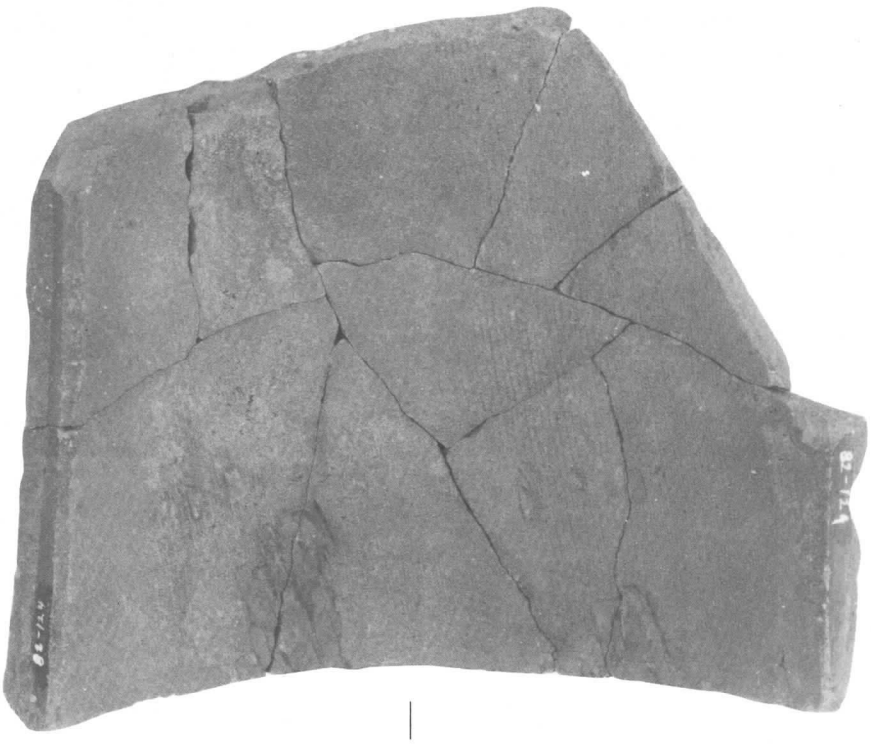
2

3

4

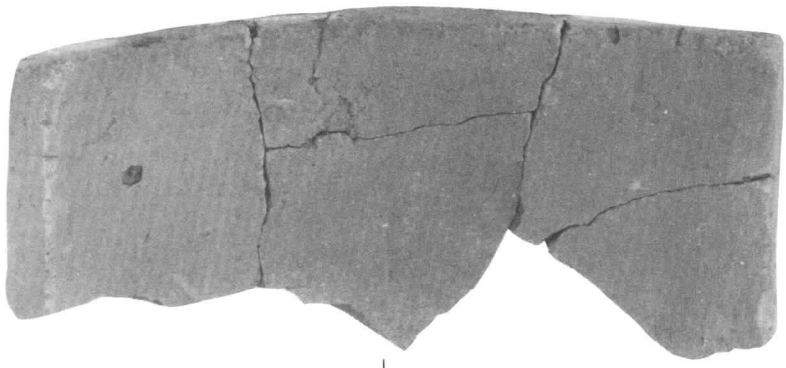
鴟　尾（1・2）　　平　瓦（3・4）

図版第八

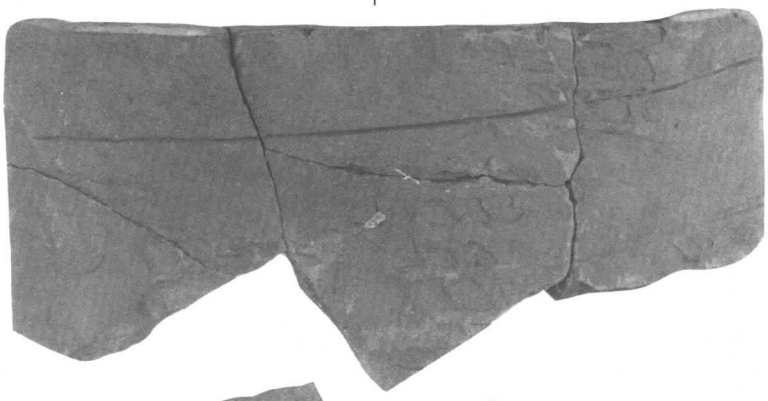


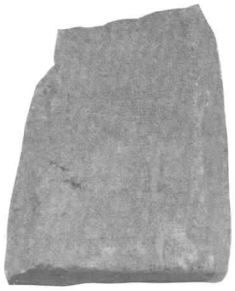
1

平　瓦

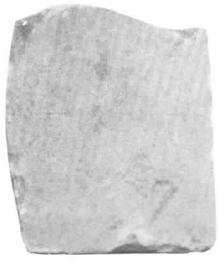


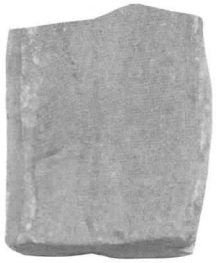
1





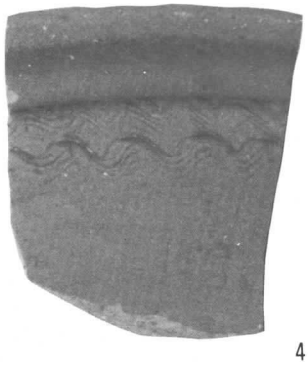
2





3

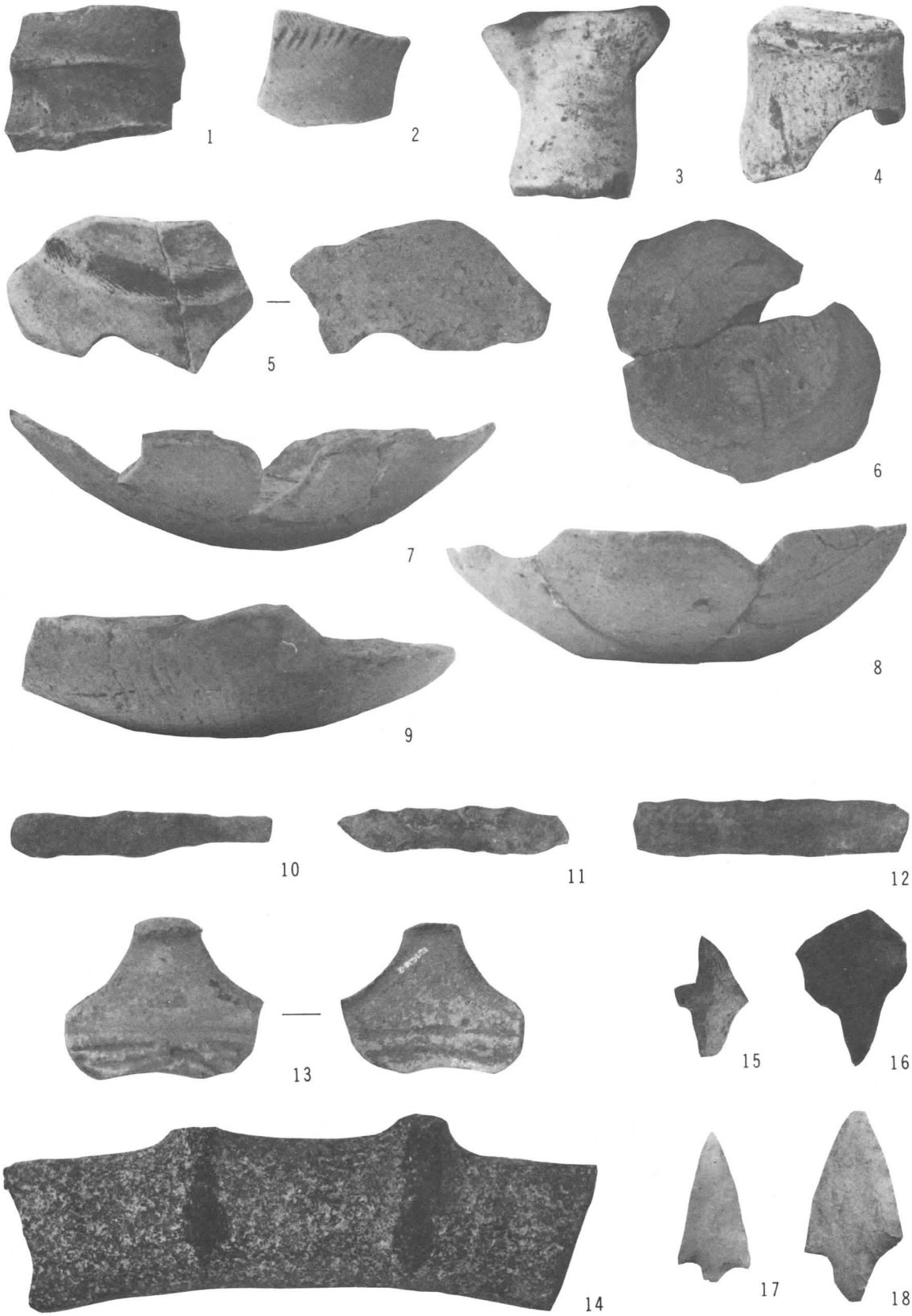
5



4

平 瓦(1)　丸 瓦(2・3)　須恵器(4・5)

図版第一〇



土師器（1～9）　鉄製品（10～12）　縄文式土器・石器（13～18）

横滝山廃寺跡発掘調査概報

——第 2 次 調 査——

昭和58年3月31日

発 行　寺泊町教育委員会
新潟県三島郡寺泊町

印 刷　株式会社　柏屋印刷所
東京都新宿区早稲田鶴巻町506-5